
桜華の雫

日向あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜華の雫

【Nコード】

N1199E

【作者名】

日向あおい

【あらすじ】

いつも彼女は1時間だけ現れる　俺は幽霊に恋をした。大人の恋愛ファンタジー。／つらい失恋から。先の見えない未来への不安から。乗り越えたい過去から。

そんな苦しさから、前に進もうと頑張っている人にこそ、読んで頂きたい現代ファンタジーです。

* 1 * 風の絵

忙しい毎日の中で、めまぐるしく時間が過ぎていく。

“君”が俺の前から姿を消してからもう3年という月日が流れたらしい。

仕事は充実している。

「松本、今日も遅くまで頑張るな」

笑顔で俺に声を掛けてきたのは、隣の席の香坂先生だ。30台半ばの彼は、まだまだ若々しい。新人の俺に教師の仕事を丁寧に指導してくれたのが彼だった。

「ありがとうございます！ これだけやっちゃったら帰りますよ、今日は」

「あんまり、無理するなよ。お先」

「お疲れ様でした」

さわやかな笑顔で、ぼんぼん、と俺の肩を軽く叩くと、香坂先生は職員室を出て行く。

一人になった職員室の時計に目をやると、もうすぐ日付が変わりそうだということに気づいた。

こうして一人になる時間は嫌いだ。

考えなくていいことを考えてしまう。

一瞬でも、そう思っただけでもう頭からこの黒い霧は晴れるどころか、濃くなっていくんだ。

……もう3年……。

いや、あれから、まだ…3年。

またこの季節がきた。

だめだ、集中できない。

思わず深いため息がこぼれた。

休憩しよう。

俺は、マグカップを片手に席を離れて、給湯室へ向かった。給湯室に入ったとたん、誰かが閉め忘れたのか、数センチ空いた窓からの冷たい風に出迎えられた。

「寒……」

窓を閉めようと手を伸ばし、ふと窓の外の風景に目をやった。

その窓の正面には大きな木が見えていた。

この学校から徒歩で5分ほどの距離に、かなり川幅の広い川が流れており、そのある川原にはかなりの数の桜の木が植えられている。春になるとこの桜並木を目当てに集まった花見客でにぎわうのも、地元では見慣れた光景だ。

その桜並木でも、一際大きな見事な桜木が、ちょうどこの学校の給湯室の窓から一直線に見えていた。

これだけでも、俺にとっては大きな発見だ。

川原の堤防があるため根本の方は見えないが、十分に横に広がった枝が見える。きつともっと暖かくなれば見事に咲いた桜の花がこの窓から見えることだろう。

その時だった。

違和感を覚えた。

だから、思わず二度見した。

「……ん？」

あれはなんだろう……。

白いものが見える。

しかもゆっくりゆっくり、その川原の方へ向かっているように見える。

俺は目を凝らしてそれをじっと見つめた。

月明かりを浴びてそこにぼんやりと浮き上がっているように見えた。

「……猫？」

はつきりと見えるわけではなかったが、妙にその猫が綺麗に見えた。

なぜだろう。

その桜木の深い緑と白い色。

月明かりと川原の闇。

まるで絵のようだった。

その中に入りたい。

俺はそう思った。

一度気になると、気持ちを抑えることはできなかった。仕事の方はそっちのけだ。

もともと、自分で仕事量を増やしているところがあるのは自覚していたから、今日やらねばならないという仕事ではない。

もう今日は帰ることにしよう、と自分に言い聞かせるようにして、ざつと後片付けをし、さつさと職員室を後にした。

職員室を出たとたん俺は走り出した。

『廊下は走るな！』と普段、生徒たちに注意しているくせに。自然と笑みがこぼれた。

息を切らして、俺はその白いもののほうに向かった。

だんだんと姿をはつきりとさせていく、それは、堤防の上にちょ

こんと座っていた。

やっぱり猫だった。

猫に近づくにつれて、足がだんだんと速度を落とす。それと反比例するように、徐々に俺の顔が腑抜けていつていないにちがいない。

俺の足がぴたりと止まった時、俺の思考もぴたりと止まった。

その瞬間、猫は堤防から川原の方へ駆け降りてその大きな桜の木の下へと向かっていつてしまった。

でも、俺には猫を目で追う余裕はなかった。

堤防より低い位置にある木の根元のあたりは、見えていなかった。だから、気がつかなかったんだ。

「あ、猫だ〜！かわいい〜」

そう言つて、屈託のない笑顔で猫に手をふる女の子だった。

*2*青い瞳の映すもの

まさに呆然とはこのことを言う。

なぜこんな時間に、こんなところに女の子がいるんだろうか…。

彼女は可愛らしい印象はあるものの、高校生には見えない。二十歳は過ぎているだろう。

肩に付くか付かないかのサラサラの髪が、肌寒さすら感じる夜風に揺れてキラキラしている。

透けるような白い肌よりも、さらに白いワンピースからは綺麗な足がスラリと伸びて、ノースリーブから華奢な肩がのぞいている。

ん？

…ノースリーブ！？

さすがにまだ気が早いんじゃないかなだろうか。

俺、コート着てるんだけど…。

「あの〜…」

彼女と視線がぶつかる。

そんな彼女の声にジロジロと観察していたことに、やっとそこで俺は気が付いた。

いや、でもこの場合仕方ない気もするぞ。

だってさ。

ここ、川原なわけ。

「すみません？」

夜中なわけで。
寒いわけで…。

なんで？

って思うのが自然なんじゃないかと思うわけで。

彼女は口に手を当てて、5メートルほど離れた桜木の下でこちらに向かって叫んでいる。

なんだか、どっと疲れた気分だ。

深く考えるなということなんだろうか…。

「ねえってば！」

「…はい」

「その子、それ以上こっちに来てくれないんだけど、こっちに連れてきてくれない？」

俺は彼女から2メートルほど離れたところに、ちょこんと座り込んだ白い子猫を見た。子猫はフニフニと尻尾を動かしながら、彼女を見上げている。

俺の視線を感じ取ったのだろうか、子猫はこちらを振り返った。

俺は堤防を降りて、猫にゆっくり近づいてた。

青い瞳がこちらをじっと見つめ返している。逃げる気配はなさそうだ。

「おまえ、あの子と知り合いか？呼んでるぞ」
なんとなく猫に話かけてしまった。

子猫は静かに俺を見つめ返した。そして、ずっと俺から視線をそらし、足音も立てずに彼女の方へ歩きだした。

「って…おい…今の言葉理解したのかよ！」

思わずつつこみながら、猫を目で追った。その猫の姿を見て、彼

女はしゃがみこんで「きゃーおいでおいでー!」とはしゃいでいる。
なんとなく俺もその猫の後について歩いた。

「君の猫…のわけないか」

「え?お兄さんの猫じゃないの?今一緒に来たじゃない」

彼女は満面の笑みで子猫を抱き上げた。

「もお、さっきから呼んでるのに全然こないんだもん。でも、かわいいー!」

そして、こちらに猫の顔を見せる彼女。

「ほら、かわいい。ね?」

同意を求められて、言葉につまる。

「…そうだね」

猫よりも…その彼女の笑顔のほうが気になってしまったからだ。

特別に美人だったり、好みの顔というわけではないのに、素直に
“綺麗だ”と思った。

しかし、それを顔に出さないようにして、俺はさっきから疑問に
思っていたことを口に出してみる。

「ところで…ここで君は何をしてるんだい?」

彼女はきょとんとした顔でこちらを見た。

「何も…?」

「…家に帰ったほうがいいと思うんだけど…もう0時回ってるよ?」
腕時計で確認しながら、俺はあきれながら続けた。

「そうなんだ!どうりで真っ暗!」

真っ暗って…。

なんだが、彼女の適当な返事に苛立ちを覚えた。

「とにかく、女の子がこんな外灯もないような真っ暗なところに一
人でいるもんじゃない。帰りなよ」

そう俺が言くと、彼女は一瞬、目を伏せた。

ほんとに、一瞬だった。

「そうしたいんだけどさ…」

すぐに笑顔に戻り、そして、彼女は言ったのけたのだ。

「私、何でここにいるかもわからないの。いつも気がつくところにいるの」

…今なんて？

思考回路は、本日何度目かの混線状態であった。

彼女のその口から出てきた言葉は、その笑顔とは不釣り合いすぎて、素直に頭の中に言葉が入ってこない気がした。むしろ、日本語？な
どと思ってしまう。

何でここにいるかわからないって……心の病氣かなにかなのか！？
言葉の出ない俺には一切ふれずに、彼女は大きな桜の木を見上げ
ながら、感慨深げに続ける。

「でも…この桜の木だけは覚えてるのよね。なんか懐かしいんだ、
すごく…すごく…なんでだろう？」

…いや、そんなこと聞かれても…。

ていうか、まさか記憶喪失？

いや、でも「いつも」って言ってたし。

ちよっと待った。落ち着いて考えよう。

つまり、どういうことなんだ？

もはや、何から聞いたらいいのかわからない。

少し、考える時間がほしい！と勝手なことを思いながら、どうに

かこうにか心を落ち着かせようと必死に口を開く。

「えっと…」

しかし、次の言葉が出てこない。

記憶喪失ですか？と聞くわけにもいかないし、まして、大丈夫ですか？などと聞けない。そんな身もふたもない質問しか浮かんでこない自分の頭に、俺は限界を感じた。

すると、彼女の方から助け舟を出してきた。実際には彼女は助け舟を出したつもりはないのだろうが、俺には一息つくきっかけになった。

「あ、ごめんね。こんなこと突然言われてもこまるよね？」

彼女はケラケラと笑っている。

そんな笑いながら話す内容なのか、これは。

自問しながらも、次の彼女の言葉を受け入れる。

「なんかね、私もしかして死んじゃってんのかな、とかって思うんだ。あ、全然わかんないんだけど、だって何にも覚えてないんだもん。なんていうか、カン？」

「は、はあ…」

もはや、俺の口からはそんな気のない返事しか出てこない。

実際、まだ肌寒い初夏の、こんな時間に真夏の装いで微笑む女性に、私死んじやってるっぽい、とか言われて、そうなんですか大変ですね？、などと答えられる方がどうかしているのじゃないかと、こっさり考えてしまう。

俺、疲れてるのかな…。

仕事しすぎたか…？

なんだか、どつと疲れを感じた俺に彼女は笑いかけた。そして、どこか寂しそうな顔で、私もよくわからないのよ、とつぶやいた。そして、そつと、彼女は大きな桜の木を見上げてこう続けた。

「気がつく、いつも、ここに、こうしているの」

ここ、とはこの桜の木をさすのだろう。この桜の木の下に、わけもわからずいつのまにか彼女は立っている…しかも、いつも。

そう言うのだ。この子は。

そんなことが実際にあるのだろうか。

「…どのくらい前から？」

不意に、俺の口から自然に出た質問だった。その声に彼女は視線をこちらに戻す。

「んゝ、結構前」

「結構…？」

その漠然とした答えに、やはり返す言葉をなくした俺に、彼女は笑顔で続けた。

「でも、ここで誰かにあったのは、お兄さんが初めてだよ」

* 3 * 無理な宿題

ていうか、今とてつもなくすごい話をしていると思うんだけど。
俺の気のせいだろうか。

ていうか、この子笑顔でなんかすごいことサラっと言ってないか？
ていうか、ていうかばっかだな俺。

落ち着け、落ち着くんだ…。

無理だ…。

理解できないぞ。

ただ分かっているのは、その「わからないの」って言った時の彼女の笑顔が俺の中で何かを壊したような気持ちになったことだ。

どういう意味かと言われてもわからない。

なんて顔で笑うんだ、君は。

泣きそうなのに、悲しそうなのに、でも、心のそこから笑っているのが伝わる。

俺はこんな笑い方を知っている。

…知っていた。

でも、無意識に記憶に蓋をする。それがこの数年で身に付いたことだ。

俺はそっと桜の木を仰ぎみて、もう一度、彼女を見た。

「とにかく、ここにいるのは危険だとおもつよ」

何とか自分のペースを取り戻そうとしてみる。

でも、それもむなし抵抗で、すぐに次の彼女の言葉にわずかに回復した思考回路は再び分断されることになる。

「でも、私ここから動けないみたい」

「……はい？」

声が裏返ってしまった。

「何度か歩いて向こうの道のほうにいつてみようとしたんだけど、進まないの、ほら」

ほら、といいながら彼女は歩いて見せた。

だが、俺にはその場で足踏みをしているようにしか見えない。

コントか？

「…歩いてるの？」

「うん、むっちゃ普通に歩いてる」

「…足踏みしてるよね」

「だよ〜やっぱそう見える？あはは」

「いや、あはは、じゃなくて…」

「なんか、お兄さん面白いね、あははは」

「いや、面白いこと何にも言っていないんですけど…」

「あははははは」

「いや、だから笑うところじゃないし！」

いくら何をいつても、彼女はケタケタと笑うだけで、俺は何を言っても無駄のような気がして、天を仰いだ。

小さくため息すら漏れる。すると、ぴたりと彼女の笑い声が止まった。

「あ、子猫返すね、はい」

彼女は唐突に子猫をこちらに差し出す。

「え、返されても…」

そのとき、彼女の小指がそつと彼の腕に触れる。

あ、触れるじゃん。

不思議とそんなことを考えた。

幽霊説を信じたわけではないのに。何故だろう。

そう首をかしげていると、不意に彼女がひらひらと手を振った。

「私そろそろ時間みたい」

「…時間？」

「うん、なんか、なんとなくわかるんだよね、時間がくるの」

突然すぎて、展開についていけない俺を尻目に、彼女は笑顔でさつさと話を進めていく。

「なんの？」

「ん？消える時間？」

…だからどうしてそう、さらりと笑顔ですごいことを言うんだ…。
頭が追いつかん。

というか、そもそも消えるってなんなんだ。

「あ、そうそう、その子猫の名前、決まったら教えてね」

「…え？飼うなんていつてないし！」

「だめ、飼ってあげてね。可愛いそうなもの！じゃあ、おやすみなさい」

「かわいそうなら、君が飼えば…って、おやすみ？」

条件反射でそう返事はしたものの、怪訝な顔は隠せない。

子猫を腕に抱きながら彼女を見つめ返すと、彼女は笑顔のまま手を振りながら、そつと姿を消した。

「……………」

そう、本当に、だんだんと彼女の姿だけが薄くなって、後ろの桜の木が見えてきたかと思うと、そこに彼女の姿は跡形もなくなっていた…。

どのくらい呆然としていたんだろう。

彼女のいたはずの場所をじっと、眺めていた。

いや、安心していた。

理解不能だった。

「……おいおいおいおい。嘘だろう…ほんとに消えたよ…」

口から思わず独り言が飛び出るほどに。

早春の冷たい風が、取り残された彼の頬と、まだ蕾の桜の木の枝を撫でていった。

* 4 * 風に誘われて

次の日、俺は頬に触れる暖かな感触で目が覚めた。

目を開けると、昨日拾った白い子猫がベットに横たわる俺の頬に、身をすり寄せて小さな声で鳴いていた。

「…おはよう。お腹がすいたのか？」

まだ頭がぼーっとする。

なんだかよくわからないが、すごい内容の夢を見た気がする。

「…夢…だよな…？」

夢以外のなんだって言うんだ。

でも、夢の中で彼女から手渡されたはずの白い子猫は、今、俺の目の前にいるわけだ。

つまり…この猫が、現実には、桜の木の下に自称“記憶喪失の幽霊の女の子”が居たっていう証拠なんだ。

だめだ、考えれば考えるだけ、ありえない状況に頭がおかしくなりそう。

俺は体を起こしベットに座りながら、わしわしと、頭をかいだ。俺の膝に猫がちょこんと座ってくる。

「昨日の女の子、おまえも見たよなあ？…消えたよな、突然…？」
子猫は首を少し上げて、俺を見つめ返した。

その姿に我に返る。

俺は猫に向かって何をいってるんだ…。

…起きよう、飯作ろう。

小さくため息をついて俺は、ベッドを後にした。

そして、今日も俺は仕事が一と段落ついたところで時計を確認したら、日付が変わっていた。

使っていた自分のマグカップを片付けに給湯室へ向かい、ふと、昨日のことを思い出した。

今日は閉まっているその窓が目に入る。

数秒その窓を眺めて、そして、そつと手を伸ばした。

窓から、あの桜の木が見えた。

不意に、俺の脳裏に昨日見た風景が映し出される。

私、何でここにいるかもわからないの。いつも気がつくところにいるの。

彼女の笑顔が脳裏から離れない。

あの笑顔は、俺にはわかる。

悲しい気持ちを抱えている、心が泣いているのに泣けない。

泣きたいのに、泣き方が分からない時の悲しい笑顔だ。

彼女は何を思っであの桜を眺めていたんだろう。

開いた窓から、冷たい風とあの桜の木が俺をまるで呼んでいるように思えた。

しかし、こんな夜更けに、女の子が川原に今日もいるだろうか。

そもそも、俺は本当に昨日女の子に会ったのだろうか。

すべてを受け入れるには、到底信じることはできず、しかし、すべてをなかったことに出来ない。いや、なかったことにはしたくない、この時すでに、どこかでそう思っていたのかもしれない。

ありえない。

こんな薄暗い川原に女の子がいるなんて。

現実のはずがない。

でも、あの白い猫は…？

昨日のそっと触れた、彼女の暖かな手のぬくもりや、感触は…？

夢にってしまうにはリアルすぎる。でも、ありえない。

こればかりが、頭の中をいつたりきたりする。

どうにか白黒つけてしまいたい。

もう、そんなことすら、ただの言い訳だったのかもしれない。

というのも、どうして自分がそうしたのかわからなかったと、後

に俺はこの時のことを思い起こすからだ。

単純に、俺はもう一度彼女に会いたかっただけだったのかもしれない。

俺は、川原の方へ向かった。

そして、堤防まで来て、息を呑む。

「こんばんは、また会えたね」

そこには昨日と同じ笑顔があった。

* 5 * 名前

再び思考停止した俺に、彼女が手を振っている。

彼女は昨日と同じノースリーブという寒そうな姿で、桜の木の根
っくに腰掛けていた。

突きつけられた現実めまいに眩暈さえ覚えながら、俺は彼女の方へよろ
よると歩み寄る。

夢じゃなかった…。

夢であってほしかったような、嬉しいような気持ちだ。

…嬉しい…？

何で？

自問自答している間に、彼女が満面の笑みで話しかけてきた。

「子猫ちゃん元気？」

半ば諦めた気持ちで、現実をなんとか受け止めようと、俺もその
隣に腰掛ける。

「ああ、元気だよ」

「つれて来てくれればいいのに」

無茶言うな。仕事帰りだ。

学校に猫連れて行けるわけないだろう。

そもそも飼うつもりなんて無かったのに、俺が飼うのが当然みた
いな言い方だ。

…実際、つれて帰ってる俺も俺だけだ。

「家で今頃寝てるよ」

下を向いてため息混じりに俺が答えると、俺の顔を覗き込むよう
に彼女が身を乗り出してきた。

俺が顔を上げると、彼女の大きな瞳に自分が映っていた。

聞きたいことは山ほどある。

理解できないことも山ほどある。

この川原は外灯もない真つ暗な所。

どうして桜の木も彼女の顔もはつきりと見えるんだろう。

どうして彼女は、この雪が降ってもおかしくないような寒空の下、薄着姿でいられるんだろう。

どう考えても、真夏の服装の彼女とコートにマフラーという完全防備な出で立ちの自分とが並んで座っていることが理解できない。

俺の頭には疑問は後から後から泉のように沸いてくる。どれをとっても答えが自分では見つからない。

「ねえ、名前は？」

「アラタ」

悶々としながら答えた俺に、彼女はすつとんきような声をあげた。

「…アラタ？」

「まっもとあらたそ、松本新」

俺がすこし胸をはって答えると、彼女は目を見開いて絶句した。

「……」

「…なに？」

固まって、じつとこちらを見つめる彼女に怪訝そうに俺が見つめた。すると、突然、彼女が噴出した。

「あははははははははははははははは！」

気持ちよく大笑いする彼女。なんで笑われているのか理解できず、今度は俺がきよんとする番だった。

「ちがうちがう！猫の名前だよ、新くん」

そこでやっと笑われた理由に気がついた。

俺の名前じゃなくて、猫の名前を聞かれたのか。

そんなに笑い転げなくても…いいと思うけど…。

「あ、ごめ〜ん。一瞬、あの猫にアラタっていう名前をつけたのか
と思つて。あの猫、女の子だよね？」

…え。

「……」

「え？」

メスだったのか……。

「……」

「まさか、オスだと思ってたの？」

昨日、混乱して確認しなかったんだ。

だから…。

「名前なんて付けたの？」

「ぐ……」

いかにも期待のこもったまなざしで、俺を覗き込む彼女。
しぶしぶ、俺は答えるしかなかった。

「……雪ノ介」

再び、静かな川原に彼女の笑い声が響いた。

実は、俺なりに考えた末の猫の名前である。白猫なので、シロにしようかと考えたが、それでは芸がないな、と思ったので、白から連想して。

「あははははははは！」

「…笑いすぎ…」

お腹を抱えて涙目になりながら笑い転げる彼女。

「アラタくんで、すごいネーミングセンスだね」

「え？そこもっ！？それも笑われてるわけ！？」

「あはははは！悔しそう、むっちゃ悔しそうな顔！」

どうでもいいけど、笑いすぎじゃないか？

流星にここまで笑われると、面白くない。

思わず、俺は口をとんがらせてそっぽを向いた。それを見て彼女はさらに笑いが止まらない。

「ごめんごめん。かわいいなあ、すねちゃったよ」

そういいながら、彼女は俺の頭をぽんぽん、と軽く叩く。

その彼女のしぐさもさる事ながら、彼女の口から飛び出してきた言葉に聞き慣れないものが含まれていて、思わず俺は彼女を怪訝な顔で振り返り、聞き返す。

「……かわいい？」

今、かわいいって聞こえたけど。聞き間違い？

しかし、彼女は間髪いれずに、即答した。

「うん、かわいい」

「誰が？」

「アラタくんが！」

「かわいい？」

「うん、うん」

「俺が？」

「うん！」

振り子人形のように力強くうなづく彼女に、どうやら聞き間違いではないらしい、と俺はいよいよ、この屈辱的な状況をどう受け止めていいかわからなくなってきた。

「…俺はかわいいなんて言われたことないぞ…」

だから低い声であさつての方を見ながら言うと、彼女はたまらず、また、嘔き出した。

「あはははははははははは。かわいい」

…また笑い飛ばされた。

今まで、実年齢よりも大人びてるね、とか、落ち着いてるね、といわれたことはあるが、「かわいい」と指を指されて笑われたことも、頭をぽんぽんと撫でられたこともない。

これはいったい何がどうして、こんな扱いをされることになったのだろうか。普段と何も変わったことはしていない、はずなのに。なぜだろう。しかも、どう見ても自分より年が下の女の子に…。

がーんと言う音が頭の中でコダマしている気がした。

しかしそれと同時に、確かに、なぜか、気持ちが楽だった。

何なんだろう、この感覚は…？

俺は、そんなことを思いながらも、それを素直に受け止められるわけではなかったので、若干ふてくされ気味でそっぽを向いた。

「けっ。なんかやさぐれた。今すぐくやさぐれたぞ、俺…」

ますます彼女は笑いが止まらない。

「何で俺が『かわいい』に該当するんだ…俺は職場じゃ『クールな松本先生』で通ってるんだ…」

そうブツブツ抵抗してみても、笑い飛ばされる。ひとしきり彼女が笑い、やっと気持ちが収まると、涙目になった目をぬぐいながらこう訪ねた。

「新くん、いくつなの？」

「って今の聞いてないし！」

「ぷっ！聞いている聞いている！それで松本新くんはいくつなの？」

また噴き出した彼女は、お腹を抱えながらこちらをのぞき込む。面白くない。

口を尖がらせながら、しぶしぶと答える。

「…23」

「23！見えないね、新くん」

「…うるさいな、童顔なんだよ」

気にしていることを、ぐっさりと言われて低い声でうなる。そんな俺に、再び、おかしそうに彼女が聞く。

「なんで嫌そうなの？」

「……男にはイロイロあるんだよ」

「ふっん」

彼女はケタケタ笑いながら答えた。

笑い上戸か、この子。なんだか何を言っても笑い飛ばされてしまいそうで、俺は段々と、うだうだ考えている自分があほらしくなってくる。

「君はいくつなの？」

「さ〜？」

「さ〜？って…」

「だって、わっかんないんだもん、しょうがないじゃん？」

あはは、と笑いながら臆することなく彼女は答えた。

うわ、あっけらかんだなあ。

すごいなあ、自分のことがわからないのに、どうしてこんなに笑顔でさらっと言えるんだろうか。自分も同じ状況になったら、こんな風でいられるだろうか。いや、確実に無理だろう。自分のことわからないのに、考えたってしょうがないじゃん、なんて言いながら現状を受け入れることなんてできないだろう。

そんなことを考えながら、俺はさらに質問してみる。

「名前もわからないんだっけか？」

「うん、全然わかんない！」

「そっか…」

俺は次の言葉を見つけれなかった。

その時、そつと冷たい風が、彼女の短い髪をなでた。

「新くんが名前つけてよ」

「…え？」

彼女はこの突拍子もない申し出の理由を次のように付け加えた。

「だって名前がないと『きみ』とか『おまえ』とか『あんた』とかになっちゃうでしょ、やだもんそんなの」

…そういう問題か…？

俺は心の中でつつこんだが、確かに、自分も『きみ』とか『お前』とか『おい』とか呼ばれるのはいやだな、などと納得しそうになった。そう考え込む俺の様子を、了承と勝手に受け取った彼女は笑顔でさらに続ける。

「次会うまでに、かわいい名前考えといてね」

え、次？と俺が思った時にはもう、彼女の姿は透けていた。
薄れゆく彼女の姿。

彼女の白いワンピース。

そして、彼女のやわらかい笑顔。

その笑顔に、俺は目を奪われていた。

なんでなんだろう。

彼女の話がほんとなら、名前もわからない、年もわからない、自分
がなんでここにいるのかもわからない。

どうして、笑えるんだろう。不安がないはずはないのに……。
どうしてそんなに凜としていられるんだろう。

そう、なんで“君たち”はそうやって笑うんだ。

「……みお……」

彼女の姿が、闇と冷たい風に溶け込むのと同時に俺の口からその
言葉がこぼれ落ちた。

それは思わず口にした名前。

もう二度と口にしなれと思った名前。

もう二度と呼ぶことのないはずの名前。

* 6 * ココロノコンパス（前編）

「松本先生？」

突然呼びかけられて、我に帰る。

「え、はい？」

目の前には同期の大谷先生が、心配そうな顔をしている。

「大丈夫ですか？ なんだか今日おかしいですよ？」

大谷先生は理科を教える若い女性の先生だ。噂によると、この職員室の中で、ずば抜けて男性職員人気が高いらしい。

俺にとっては、唯一の同期で気軽に話せる同僚なのだが、俺をダシに彼女を食事に誘おうとたくらむ輩も多い。いや、輩については、先輩がたに失礼か。

「大丈夫ですよ、やだなあ」

と言ってから、初めてなぜ心配されているのかが理解した。

「うわ、何だこれ……」

そこには俺の机を基点として、書類が四方八方に飛び散る大惨事となっていたのだ。

いつのまに落ちたんだ？

呆然としてそれを眺めていたら、大谷先生が書類を拾い集めだしたので、俺も慌てて作業にかかる。

「何だこれ、じゃないわよ。ちよっと最近働きすぎなんじゃないの？」

周りに聞こえないように、小声で彼女が話しかけてくる。

「そんなことないよ……たぶん」

確かに疲れてるから、“変なもの”を見てしまったのかと思って混乱したけど、昨日ちゃんと確かめたし。いや、確かめてしまったし。

……現実だよな……？

まさか、過労のために神経衰弱に陥った俺が、幻覚を見るようになってしまっただけってことはないよな…？

「松本先生？」

また考え込んで動きが止まってしまっていた俺を大谷先生がため息混じりに呼ぶ声が聞こえて、はっと我に返った。

「…今日は…早く帰ろうかな」

「そうしたら？ なんだか今日は、ずっと上の空みだったわよ」
書類をすべて拾い終わり、大谷先生が俺にそれを手渡した。

「すっかりしてくださいよ、松本先生」

いつも、うつかりが多いのは大谷先生の方だというのに、ここぞとばかりに彼女はニヤリと笑うのだった。

でも、今は言い返せない。

実際、自分が上の空だったこと、そしてそれすら気がつかずにいたのだから。

そして同時に、気がついてしまった。

昨日あれから、ずっとずっと桜の木の下で出会った彼女の事ばかりを考えていたこと。

…まじかよ。

そう。

気がつくと彼女のあの笑顔が脳裏に浮かぶ。
目をつぶれば鮮明に、目をつぶらなくても明確に。

何を思って君はそんな顔で笑うんだ。

だめだ、今は仕事に集中しなくては。

小さくため息をついたら、向かいの席の大谷先生と目があつた。大丈夫だから、というように笑いかけて、机の上にあつた書類を無造作に手にした。しかし、その文面なんて頭に入ってこない。

そして新たな自問自答。

俺、あの子のことばかり考えて、仕事も手につかないじゃないか。

今日、仕事全然進んでない。

おいおい…冗談だろう？

確かに…気になるけど…。

さつきからずっと、あの子のことばかり考えてる、ていうか、あの子のことしか考えてないけど。

でもそれは、あんなの見たら誰だって、気になるだろうし！それだけのことで…好きなのは…ないよな？

だって、現実か幻覚かすら疑ってる段階だよ、俺。相手は正体不明の自称幽霊。

いやいやいや。

ないだろう。ないない！

さすが、23年も生きていれば、恋の一つや二つ経験している。でも…この感情は何なのかと、聞かれても答えに困る。

だいたい…俺はもう……。

俺が深いため息をつきながら、先ほど拾い集めた書類の山に再び手を伸ばした瞬間、派手な音が職員室に響き渡り、再び書類が舞い散る惨劇が繰り広げられた。そして向かいの大谷先生にジロリと俺は睨まれるはめになったのである。

時計が8時を回った。

「今日はお先に失礼します」

俺は、まだにぎわっている職員室の入り口で、残業する先生方に声をかける。

「なんだ、今日はやに早いな、松本！デートか？」

「え、松本先生、彼女いたんですか？」

「えゝ嘘だゝ！いるわけない、いるわけない」

口々に先生方が勝手なことばかり言う。

まったく相手にせず、俺は「お疲れさまでした」とだけ挨拶をして職員室を後にした。

職員用玄関を出ると、なんとなく足を止めた。

ここからは桜の木は見えない。

わかっていても、あの桜を探してしまっている。

…今日も彼女はあそこに一人でいるんだろうか。

いや、今日はこのまま帰ろう。

考えるのはやめよう。

子猫も待つてるし。

帰ろう。

俺は、まるで自分に言い訳するようだな、と思いながらも帰路についた。

部屋に響くテレビの音。

膝にうずくまる子猫の規則正しいリズム。

そろそろ日付が替わる。

落ち着かない。

「寝よう。もう寝てしまおう」

自分に言い聞かせるように俺は子猫をどかして、布団に入る。

私、何でここにいるかもわからないの。いつも気がつくところにいるの。

いつもあの木の下で、何をしているんだろう。

あんな寂しい場所で、一人でいつもいるのだろうか。

名前も年齢も、自分が何者かも分からず。

何のためにあそこに居るのかもわからない。

つらくないわけが無い…。

でも…この桜の木だけは覚えてるのよね。なんか懐かしいんだ、すごく…すごく…。

あの桜の木に何か思い出があるのかな。

でも自分のことが思い出せないのに、桜の木だけ覚えてるってのもどうなんだろう。

そもそも、桜の木から離れられないみたいだったし。

懐かしくて、居たくてあそこに居るんじゃないくて、離れたくても離れられないのかな。

実はあそこに居たくないのか？

私もしかして死んじゃってんのかな、とかって思っただけ。

「ああ〜もっっ！」

俺は思わずベッドから半身を起こして、叫んでしまった。
それに驚いた子猫がビクツとして、離れたところで固まっている
のが見える。

ちらりと時計に目をやると0時40分を回っていた。

「雪。行くぞ」

反射的に立ち上がり、子猫とコートをひつつかんで駆け足でアパートの外へ出る。

外は今日も冷え込んで、口からはき出される白い息が空に消えていく。

まだまだ細い月は、雲の間からひよっこりと姿を見せていた。

俺は走った。

こんなに全力で走ったのは何年ぶりだろう。

息が上がる。

足がもつれる。

連日の残業で体が悲鳴をあげていたはずなのに。

勝手に体が動いていた。

この気持ちをなんて呼ぶかなんて知らない。

もう一度君に会いたい。

あれこれ考えたって、君の笑顔が頭から離れないし。
君に会いたい。

そう思ったのは紛れもない真実なのだから。

実際の距離にしたら、たいしたことはないのに、永遠にも感じられる長い時間必死に走り、桜の木の前にたどり着いた。

そして俺は、今日一日何度も何度も頭に思い浮かべたその姿を実際に目にして、顔の筋肉が緩むのを感じた。

「新くん、また会えたね」

彼女は桜の木の幹を背に、笑顔でこちらに手をふっていた。

＊7＊ココロノコンパス（後編）

「ごめん…今日は…遅くなつて」

息が上がっていてそれだけ言うのが精一杯だった。
言ってから気がつく。

何がごめんなんだろ。別に今日会う約束をしたわけじゃないし、
時間を指定していたわけでもない。

でも、まるでデートに遅刻した気分だった。

「お仕事お疲れ様。走ってきたの？」

そんな俺を、彼女はうれしそうに眺めやる。

「……今日は家から来たんだ。ほら……」

俺は胸に抱いていた子猫を彼女に見せた。

「あーっ！雪ちゃんだ」

彼女はまるで華が一気に咲くように、笑顔になって子猫を抱き上げた。

「よかったね。優しい人に拾ってもらえて。」

無理やり君が飼えつて強制したくせに、よく言うよ。

心の中で俺がぼやいていたら、彼女が「ん？」と不思議そうに動きを止めた。

「え、わざわざこの子を手を連れてくるために家に戻って走ってきたの！？元気だね」お仕事の後なのに」

いや、結果的にそうなつてしまったけど、最初からそういうつもりだったわけじゃないし。

なにしろ、疲れてたから家でゆっくり寝てるつもりだったんだから。

なのに走ってきてしまった。しかも全力で。

体は仕事でくたくたな上、その体で走ってきたはずなんだ。
俺何やってんだろう。
余計疲れることしてるじゃん。

でも、目の前で微笑む彼女の顔をながめていたら、そんなことは
どうでもよくなった。

そればかりか、疲れも吹っ飛んでしまった気がした。
不思議だ。

こんなことは初めてだ。

ずっと気持ちが楽になった気持ちだった。

もう、誤魔化すことなんてできない。

君の事がもっと知りたい。

この気持ちをなんて呼ぶかは知らない。

今までに感じたどんな気持ちともちがうから。

一瞬、彼女の瞳が俺を捕らえた。

俺にとっては、とても長い時間に感じた一瞬だった。

「あ、そうだ」

沈黙を破ったのは彼女のほうだった。

「私の名前ってミオ？」

「え？」

俺の思考が停止した。

なんでその名前を…？

よっぽど不思議そうな顔をしていたのか、口に出してそう質問し
たわけではないのに、彼女はこう続けた。

「昨日私が居なくなる前にそう呼ばなかった？」

「…言った……かな…」

確かに、言った。その名前を口にしてしまった。

でもそれは、彼女の名前を不意に思いついた、というわけではな

かった。どうしてその名前を口にしたのか、実は俺にもわからなかったのだ。そして、同時に色々なことを思い出した。

…もう大丈夫だと思っていたのに…。

「ありがとゝ気に入っちゃった！」

俺は苦々しい表情になった自分をどうにか隠そうとした。

「…そうなのか…」

できればほかの名前がいいな、と切なる願いもあったが、彼女の本当にうれしそうな笑顔に言い出すきっかけを無くした。

「うん、ありがと。今日はそれが言いたかったの」

満面の笑みで彼女は、俺に頭を下げた。

参ったな。

その名前だけは…もう自分の口からでてこないと思っていたのに、まさか自分がその状況に自分を追い込む形になるとは…。

自己嫌悪と罪悪感と…黒い絵の具のようなものが俺の心をじわじわと染めていくのが自分でわかった。

言葉をなくして、喜ぶ彼女の笑顔を見つめるしかなかった。

すると、彼女が小さく声を上げた。

「あ、ごめん、時間だ」

俺ははっとした。

「え、もう…」

俺の無自覚に、普段なら口にしないような言葉が飛び出した。

それだけ、正直な気持ちだった。

もう少し、彼女と一緒に話していたい。

もっと彼女のころころ変わる表情を見ていたい。

そう思ったんだ。

「うん、ごめん。でも会えてよかった。今日は会えないのかと 생각했다から」

彼女は子猫を俺に手渡した。続けて別れの言葉を言おうとしているのがわかる。

ぎゅっと胸を締め付けられるような痛みを感じた。

言葉がうまく出てこない。

どうやって引き止めたらいい？

言葉にできない気持ちがあふれて、俺は思わず彼女の腕をつかんでいた。

そんな俺に、彼女の笑顔が一瞬ゆがんで見えた。

「ごめんね、また会えるよ」

その言葉が合図のように、彼女の体が段々と色をなくしていく。

ほんとにまた会える？

ここにすれば君にまた会える？

“また”が絶対くるとは限らないのに？

俺の中を黒い闇が一気に埋め尽くして、息が苦しくなってくるようになった。

だめなんだ、“今”の気持ちは今伝えないといけないんだ。

俺はそれを散々後悔してきたんじゃないか。

この気持ちを伝えなくては。

でも、自分でもこの気持ちを説明できないのに、どう伝えたらいいのだろう。

あせる気持ちともどかしさで、彼女をつかむ腕に力がこもる。

「大丈夫、また会えるよ」

彼女はその言葉と、俺の手のひらに彼女の確かな腕の感触と温もりを残して、川原からの冷たい風の中に溶けていった。

俺は彼女を掴んでいたはずの手のひらを強く握りしめた。

その感触と温もりの余韻に浸りたかった。

その感覚だけが彼女が今ここに居たという確かな証拠なんだ。

これしかないんだ。

俺はぐつと唇をかみ締めた。

桜の木を見上げると、少しだけ蕾が膨らんできていた。

* 8 * 時間

どこをどう歩いて帰ってたのか、気がついたらちゃんと自宅の玄関のドア前についていた。

でも、帰宅したのは俺の体だけで、心はまだ桜の木の下にいる。

君はいつたい誰なんだ。

その疑問が頭の中に何度も何度も繰り返し沸いてくる。

目を瞑れば、今もリアルに思い出される記憶。

彼女の笑顔も。

彼女の笑い声も。

彼女の腕の感触も。

彼女が消えていった後に俺の胸に残された痛みも。

俺は深くため息をついて、玄関を開けた。

「ただいまつと。雪、寝るか」

腕の中にいた子猫をそつと床に下ろした。

そつと頭をなでてやり、再び彼女に思いをはせる。

一つだけわかったことがある。彼女の言う『時間』のことである。

彼女に会った3日間とも正確な時間はわからないが、午前0時から1時の間。

今日は0時40分まで家にいて走って川原に向かった。移動時間はおそらく15分前後だろう。そして彼女に会えたのは、わずか数分。つまり彼女は1時には“消えて”しまうのだ。

明日：確かめてみよう。

この時、俺はすでに彼女を取り巻く不思議な現象への興味とは、明らかに別のものを少し自覚していた。

しかし、この気持ちを向き合ってもいいのだろうか。
自分にはその資格があるのだろうか。

そんな気持ちが胸を締め付ける。
それでも、やはり目を閉じれば、彼女の笑顔が自分の心を温かく
するんだ。

もつと彼女の事が知りたい。
今はそれだけでいいじゃないか。

玄関から部屋へ上がった俺は、部屋の電気をつける気分になれず、
そのまま倒れ込むようにベッドに横になった。

次の日出勤した俺は明らかにいつもと違った。
自分でもわかった。

もともと集中力は高い方なのだが、今日はそれにも増して尋常で
ないほどのスピードで仕事を消化していく。いや、消化できてしま
うことに自分でも驚く。はかどるのだ。昼休みもろくに取らず、コ
ンビニで買ってきたサンドイッチをかじりながら、とりあえず空腹
を解消したという具合だ。

そして仕事は23時には自分で決めた範囲をすべて片付けること
ができた。

なんて気持ちいいのだろう。

こんな達成感と充実感に溢れた気持ちは久しぶりだ。

“今日は働いたぞ”と胸を張って自慢できる。他の人ではなく、
自分自身にだ。

俺は、机のパソコンの電源を落とす、職員室を後にした。
そして、廊下に出たとたん自然に駆け足になった。

君は今日もあそこにいるのだろうか。

今日も君に会えるのだろうか。

絶対、なんてありえない。

約束なんて、どこにもない。

それでも俺は全力で走っていた。

*9*また会えたね

河原の沿いの道からさらに堤防の下へ降りていった。
暗闇の中を走った。

まだまだ細い月が目的地だけを照らしている。なんとも不思議な光景だ。そこだけがスポットライトを浴びるように、ぼんやりと明るくなっている。

目指すそこには大きな桜の木がある。その蕾は徐々に大きくなってきたいるが、桜華の乱舞を見るにはしばし時間を必要としそうだ。

俺は月明かりの中、目をこらした。

しかし、俺の望む笑顔はそこには見あたらない。

まだ彼女は現れてないのか？

それとも今日は現れないのだろうか…？

明らかに落胆している自分がいた。

でも、同時にこれは昨日浮上した疑惑を確かめる絶好の機会なんだ。

まず俺は携帯で時間を確認した。

23時37分。

よし、まだ日付は変わっていない。

俺は、息を整えるために少し深く呼吸した。

そして彼女が昨日そうしてたように、桜の木に背を預けた。冷たい3月の風が俺の頬を優しくなでていった気がした。

しばらくして、携帯のバイブ音が静寂を打ち破った。

思わず体がびくつと震える。
び、びびったじゃないか。
誰だよこんな時間に…。

携帯を確認するとメールを受信したことがわかった。

題名：緊急事態発生

From：内田純うちだじゅん

千尋ちひろが帰ってきた。

どこが緊急事態だ……。

緊張の糸がぷつと切れた音が聞こえた気がした。

メールは幼稚園からの幼なじみで、今も地元の田舎にいる。“千尋”というのは純の妹のことで、地元の実家を離れて街で大学に通っている。その千尋が春休みで帰ってきたので、俺にも帰省せよと言いたいのだ。

ったく…。

今何時だと思ってるんだ…。

俺がこのくらいの時間なら仕事でまだ起きていることを知っていたの犯行である。

そういえば、今年の正月は実家に帰る時間がなかったからしばらく純たちに会ってない。

いつから会ってないのだろうか。

そして、俺は夏休み以来、純たちに会ってないことに気がついた。帰省命令がくるわけだ。

しかし、春休みは教師にとっては年度の切り替わりの時期だからとても忙しい。

無理だ。夏休みまで…いや、せめてゴールデンウィークまで待ってくれ。

きつとこれを純に納得してもらうにはかなり体力がいるのだろうと思うとグツタリ肩を落としたくなる。

俺は純に短く『善処します』とだけ返信した。すると間髪入れずに携帯が鳴く。

携帯の液晶には『内田純』と表示されていた。

うわ…電話かかってきた…。

「……もしもし？」

恐る恐る、受話ボタンを押し、応答する。すると、けたたましい聞きなれた声が携帯から聞こえてきた。

『もしもしじゃねーよ。お前さ…そこは可愛く“帰るよ”だろー“善処します”とか、帰る気なさすぎ、やる気無さ過ぎ、おれを捨てる気！？』

「捨てる気って…そもそもおまえ俺のものだったの…？」

『だって…現地妻だろー！愛人だし！』

「…可愛く言ってるつもりだろうが、俺は愛人を作った覚えはない『うわ最低だなーおまえ。俺をおまえ無しでは生きてけない体にし』
といてそういうこと言っわけー？」

“おまえ無しでは生きていけない”とは俺が地元に戻ると、俺の趣味が料理であることをいいことに、味をしめた純が“腹へった、なんか作れ”といつも要求していることを指す。

「だから人聞きの悪い言い方するなっ！おまえが自分で飯つくればいいだけだろーっ？」

「とにかく、帰ってこい、いいな。じゃ俺は寝る」

抵抗むなしく、プチ、という音とともに電話が切れた。

なにそれ！

言いたいことだけ言って切りやがって…。

俺がげんなりして携帯を見つめていると、頭上からクスクスと可愛らしい声が聞こえた。

はつとして顔を上げるとそこには俺がずっとずっと待ち焦がれた笑顔があった。

会えた。

ほんとに会えた。

君に会えただけで、俺の心はこんなに満たされる。

あーだこうだーと考えても、俺の中から、君はちっとも消えないんだ。

だから、素直に君に伝えよう。

今の正直な気持ちを。

やっこの思いで俺の口から出たのは、情けないほど小さな声だった。

た。

「会いたかった…」

そう、彼女に笑いかけると同時に、自分の目頭が熱くなったのがわかった。

*** 10 * 素直な気持ち**

「こんばんは」

彼女はこちらに笑いかけた。

でも、すぐにその笑顔が驚きの表情にかわることになる。

理屈じゃない。

彼女が誰とか何んなのかとか、そんなことはどうでもよかった。
体が勝手に、自分に正直に動いていた。

俺は、そつと、でも彼女の存在を確かめるように、彼女の細い体を抱きしめた。

消えてしまわないように…。

「あの、新しくん？」

戸惑った彼女の声に、俺は我に返る。

「ご、ごめん！」

慌てて彼女から離れた。

自分が一番自分の行動に驚いている。

俺は何をしてるんだ。思いつきセクハラじゃないか、これじゃ。

「なんかあったの？」

彼女はクスクスと笑う。

「いや、何も無いけど」

「ふゝん。すごい嬉しそうだったよ、だって」

「…そうだった？」

俺はごまかすように視線をあさっての方へ向ける。

しかし、彼女はそんなことではごまかされてはくれなかった。

獲物を見つけた猫のような、嬉々とした目で俺の顔を覗き込む。

「あれ？ やっぱりなんかいいことあったんでしょ？」

「……ないって」

顔近いつて。

勝手に心臓が今までの倍のスピードで動き出した。

「ほんとに？」

「……あ！ そうそう。君は何もわからないって言ってたよね」

「うん。分からないよ。っていうか！ “君” じゃなくて “ミオ” ですよ！」

一瞬、言葉に詰まらせて、視線を泳がせた。そして少し考えてから、観念したように言い直した。

「……ミオがいつも “時間” がきたって言うだろう？」

「うん」

彼女は身を乗り出して俺の話にくいついた。彼女の大きな目に映る笑顔の自分が見えた。

俺、今こんな顔で笑ってるんだ。そんな自分が不思議だった。

「あれね、1時のことみたいだ。そして今0時20分くらいだから……きつと彼女は0時から1時の間ここに現れるんだよ」

「そうなのかつ！」

「だと思う。今日はそれを確かめようと思ってさ」

「わあ！ なんか嬉しいなあ！ ありがとう！」

俺が自分の導き出した結論を彼女に告げると、彼女は予想外に手放して喜んだ。

なんでありがとうなんだろう。

お礼を言われた理由が見つからず、小首をかしげる。

「……ありがとう？ お礼を言われる理由が全然と思いつかない……」

「だって私、自分のことなのにわからないことだらけでしょ。だから少しでも手がかりになることってすごく嬉しいの」

彼女は、えへへと笑った。

それで、俺ははつとした。
そうか。

自分のことがわからないのに、不安じゃないはずがない。
「よし、じゃあさらに疑問を解消してこうか」

「え？ほんと！？」

気を良くした俺は、すぐに閃いたことを提案してみた。
すると彼女の顔がさらに、ぱあーっと明るくなった。

「まず、ミオの身長。はい、しっかり立って」

「はあーい」

彼女は嬉しそうに俺の前に姿勢を正して立った。
すると彼女はわりと背が高いことがわかる。

「俺が175だからなあー。結構背がたかいぞ。160はかるくある」

俺が彼女の頭をぽんぽんと叩いた。

その時、彼女が渋い顔をしているのに気がついた。

「どした？」

「…今なんか…思い出したかも……？」

「え？」

「うーん…はつきりとじゃないけどこうやって誰かと背くらべした記憶が…」

「ほんとに！？すごいじゃないか！ちょっとずつ思い出すかもしれないぞ」

「…顔とか思い出せないけど…」

俺は考え込んでしまった彼女の肩にをそつと手を置いた。

「焦らないでゆっくりやってこー。そのうち名前も思い出すかもしれないし」

「…そうだね」

再び彼女に笑顔が戻る。

うん、彼女には笑顔が一番合う。

そんなことを思いながら、つられて笑顔になった俺は、はい次、

と続けた。

「次は…」

「次は？……きゃっ」

興味津々な様子だった彼女が急に小さな悲鳴を上げた。俺がひよいと抱き上げたからだ。

「んー。軽い。ちゃんと食ってたんだろか」

すると少し恥ずかしそうにしている体を硬直させている彼女に気がつき、それが可愛らしく思えた。

「…何てれてるの？」

「て、て、てれてなんていないよっ」

「ふーん」

今度は俺が口の端を上げてニヤリと笑う番だった。

顔が真っ赤に染まった彼女にわざとかしこまった言い方をする。

「身体測定デスヨ。身長次は体重と相場が決まってるでしょ？」

「~~~~っ！」

「あははは。顔真っ赤」

「もう！おろしてっ！」

急に彼女がバタバタと暴れ出した。

「落ちるよ」

笑いながら言っていると彼女の動きがピタリと止まる。

彼女の心臓の音が俺の胸に伝わってきた。

どくん。

どくん。

心臓が動いてる音がする。

生きてる。

幻なんて思えない。

君の重みも。

君の温もりも。

君の鼓動も。

確かに、今俺の腕の中にある。

俺は彼女の瞳に吸い込まれるように見つめた。

どのくらい見つめ合っていたのだろう。

永遠にも感じる短い時間。

ふと、彼女の瞳が揺れた。

それだけで、彼女が何が言いたいのか悟った。

それが伝わったのか、彼女は敢えて言わなかった。

そして、どちらからともなく俺たちは優しく唇を重ねた。

君が好きだ。

はつきりとそう感じた。

その時、彼女の腕が俺の首を抱き締め終わるか終わらないかで、俺の腕の中からすべてが…消えた。

暖かな吐息も。

柔らかな唇の感触も。

少し早い彼女の鼓動も。

心地良い彼女の重みも…。

残ったのは、この胸の痛みだけ。

この切ない痛みだけが君のいた証

。

*** 10 * 素直な気持ち（後書き）**

今週末、一気に書いてしまいました！
ついに自分の気持ちを自覚した新くん。
しばらくラブラブモード全開な予感です。

簡単な感想＆ご意見＆『読んでます』のご一報いただけますと幸いです。

* 11 * かなわぬ約束

「はい」

突然、目の前に紙カップが差し出された。

「あ、ありがとう」

大谷先生だった。彼女は、自分の分のコーヒーを片手に、俺の隣に座った。

見渡すと、休憩室には他に誰も居なかった。

「ね、松本くん。最近おかしいよ？なんかあったの？」

大谷先生を見ると、こちらを見ずにコーヒーをすすっている。

「そう？」

俺もコーヒーをすすする。

「今日はぼーっとしてるし。昨日はすごい勢いで仕事してて、話しかけずらいし。何か困ったことがあるなら相談にのるよ」

ずいぶん心配かけていることにこの時気がついた。

そんなに自分は普段と様子が違うのか。全然自覚がなかった。

ただ、自分の気持ちや頭の中についていけないんだ。

俺はどうしたいんだろう。

どうしたらいんだろう。

彼女は何者なんだろう。

本当に死んでいるんだろうか。

確かに昨日、心臓が動いている音を聞いた。

ふ、と俺が無意識にため息をつくのと同時に隣からもため息が聞こえてきた。

「大丈夫？」

そんな大谷先生に、これまた無意識に俺は問いかけていた。

「幽霊って居ると思うか？」

「……はい？」

「幽霊つてさわれるのか？」

「…松本くん……？」

「つか、幽霊がこの世にとどまる理由って何なんだろう…」

俺の中の疑問は時間を経ることに増えていく気がする。

仕事は放課後になって、まるで帳尻あわせのように0時前に終わった。

俺が笑顔で、学校を後にしようとして外に出たとき、顔にぽつりと冷たいものを感じた。

雨かよ…。

傘をさすほどではないが、ぽつりぽつりとアスファルトを雨の雫が黒く染めていく。

折りたたみ傘をさそうと鞆をあさろうとして、俺ははっと手を止めた。

彼女がこの雨の中待ってるかもしれない。

雨がひどくなる前に、傘をさしてあげないと…。

俺は傘をさすのをやめて走り出した。腕時計は0時10分を指していた。

息を切らしてその場所にたどり着いたが、彼女を見つけることができない。

なんで居ないんだ…？

頭が真っ白になった。

雨が少しひどくなってきた中、携帯がぬれることも気にせずに、携帯の時計を確認する。

0時22分。

どうして、なんで？

俺の推測だと、0時から1時の間に彼女に会えるはずなのに。

どうして居ないんだ？

頭の中にはこの単語ばかりがぐるぐると回る。

呆然する俺を雨がどんどん濡らしていく。

待ち合わせをしてるわけではない。

約束をしたわけではない。

彼女の意志で現れないのか。

それとももう、一生このまま会えないのか。

君は俺の前からあのまま居なくなるの？

永遠なんてあるわけない。

居なくならないで、俺の前から。

突然居なくならないで。

もう、大切な人を突然失うことは耐えられないんだ。

俺の頬を、雨の雫が伝っていた。俺の涙と一緒に……。

* 12 * 取り憑かれたら

俺は携帯を耳に当てて、呼び出し音を聞いていた。その音がぷつりと止んで、懐かしい声が聞こえる。

『もしもし〜?』

「……………」

『も・し・も・し?』

「……………おれ」

『しってるっつの! お前、今何時だとおもってたよ、2時半だぞっ!』

俺は2時まで桜の木の下で彼女を待ち、傘もささずに帰宅した。そして、コートもマフラーもそのままに、部屋の電気もつけずに、玄関先で座り込んだ。

暗闇の中、携帯を耳に当てる俺を膝に乗った子猫が見上げている。携帯から聞こえる声に、明らかにほっとしている自分がいた。

「……………知ってる」

俺は、ぼそつと消え入りそうな声でつぶやいた。

『はあ!? じゃあ、俺が明日も仕事で朝5時半には起きるつても知ってるんだよなあ?』

電話先で幼なじみの内田純が怒りを露わにまくし立てている。きつと、カンのいい純のことだから、全部言わなくてもい로운なことを悟ってる。だからこそ、こういうときに純の声が聞きたくなるんだ。

『どうしたんだ? ん? ほれ、俺様が聞いてやるから言ってみろ?』

「……………どうもしない」

『ほっほ〜……………切るっ!』

「嘘ですゴメンナサイ……………」

『うむ』

純の優しさが胸にしみて、俺の心の中は弱音と泣き言と不安と切

なさと苦しさでいっぱいになった。

「あのさ…もしお前が死んで幽霊になったら、何してほしい？」

「はい！？お前、俺に死んでほしいのかっ！？」

その真剣な純の返事に、俺は思わず、ぷつと噴出した。

「いや…そうじゃなくて」

『俺は今、すごいシヨックを受けたぞ。夜中にたたき起こされたと思ったら、死んでくれとか親友に言われる俺、すごくかわいそうじゃないか？究極にかわいそうじゃないか？え、そこんどこどう思うよ、松本新先生』

「だから、違うつて…たとえ話だつつつの…幽霊がある場所から動けないですつと毎日現れるつて、どういうことなんだと思う？」

俺は、他の人なら笑い飛ばすだろう質問をこの親友に問いかけてみた。なんとなく彼なら答をくれそうな気がしたからだ。

案の定、純は即答した。

『そらお前、未練があるんだろう』

「未練？」

『やり残したことがあるんだろうよ』

「…なるほど」

普段なら、彼の意見は参考程度で鵜呑みにすることはないが、今回ばかりは的を射ているような気がする。

胸の中で、何かがストーンとはまった気がした。

「よし、寝る」

『は？なに、それだけ？』

「……なんかすつきりした」

『なんかよくわかんないけどさ、お前いつから霊媒師になったんだ？除霊でもすんのか？坊主にでもなんのか？』

「ならん！」

『まあ、俺は丸刈りハゲ坊主なお前でも受け止めてやるぜ。安心し

る！』

「だから、坊さんにはならんと言っにつ！」

『何にせよ、俺は寝る。意地でも寝る』

「……そうでしたスイマセン。ネテクダサイ」

『うむ、わかればよろしい。たださ……』

純は一度言葉を切って、こう続けた。

『取り憑かれたりすんなよ、どんだけ可愛い幽霊でもさ』

うわ、びっくりした。何も言っていないのに、なんでわかるんだお前……こわっ！

そんな絶句した俺をまったく気にも留めずに、じゃあな、と純は一方的に電話を切った。

それにしても。

取り憑かれるな……か。

膝の上でいつの間にか丸くなって規則的な呼吸をくり返す子猫をなでながら、俺はため息をついた。

取り憑かれたら、ずっと一緒にいられるのかな……とか一瞬考えるあたりが、重傷だよな……どうしよう……。

でも、そんなことを考えられるだけ、いくらか自分を取り戻しているのに、俺は気がついていて。心が少し軽くなった気がする。

この分なら大丈夫だろう、純がそう思って、電話を切ったのもわかっていて。

いつだって純にはかなわないんだ。

ありがとう、純。

なんだかんだ文句いいながら付き合ってくれる親友に面と向かつ

てはいえない言葉だけど、きっと伝わっている気がする。

子猫を抱きあげて、よいしょ、と立ち上がった。
窓を開けると雨がしとしとと降っていた。

* 13 * ただそれだけだから（前編）

それから、数日雨は降り続いた。

俺は傘をさし、桜の木の下で彼女を毎日待ち続けた。

でも、彼女は現れない。

俺は漠然とした期待を抱くようになっていた。

朝、起き抜けにテレビの天気予報をつける。

“雨は夜遅くには止むでしょう”

最近はまだでアイドルのような扱いのお天気オネーサンが、笑顔でそう言った。

「よしっ！」

否応無しに気合が入ってしまう。それは、数日間の雨のおかげで芽生えた、淡い期待のせいだ。

雨。

彼女が出てこれない理由は、雨なんじゃないか。

彼女が“現れる”時間に午前0時から1時までという制限があるのなら、天候に制限がある、なんてことも考えられるのではないだろうか。彼女に会えたときは、確かに月が綺麗に見えるほどに、晴れ渡っていた。だから、何らかの理由で、雨が降ると彼女は“出てこれない”のではないだろうか。それがどんな理由なのかは、この際どうでもいい。彼女が現れる時間の理由だって知ったことではないのだから。

そんなことを考えていたので、俺は自分でも気がつかないほど上機嫌だったらしい。俺は膝の上ののっていた白い猫を抱き上げて、自分の顔の高さまで持ち上げた。

「雪〱聞いてくれよ。今日は雨があがるんだってさ」

そう言われても、猫にわかるわけもなく。しかし、子猫は俺の鼻の頭を小さな舌でペロリと舐めた。

“会えるといいね”と子猫が言っているような気がした。

「お前はいい子だな〱よし、今日の朝飯は腕によりをかけて作ってやるぞ」

俺は鼻歌まじりで、台所へ向かった。

でもこの上機嫌も長くは続かなかった。

朝、職場に行くとすぐに、年配の先生から「松本、これよろしくな」と、まるで朝の挨拶のようにとっても簡単に、無理難題を押し付けられた。

しかも3日以内にやれという期限付き。

「松本先生…？」

大谷先生が声を掛けてきた。

「今、俺に近寄らない方がいいぞ」

「……」

大谷先生は、思わずでた俺のドスの効いた声にビクツと体を硬直させたようだった。でも、そんなことにかまっている余裕もない。

年配の先生から受け取った書類にもう一度じっくり目を通す。

そして気がつく。

これ、もつと早く分かった内容な筈なのに、こんな期限間じかになるまで忘れてたんじゃないだろうか。それで、今になって面倒になって俺に押し付けてるじゃないか。下っ端だから何も言えないと思って足元みやがって…。

休日返上、睡眠返上、休憩時間すら返上すればギリギリなんとかなりそうな時間。なんとか…するしかない。

俺は、苛立ちを覚えながらも、無言でカタカタとキーボードを打

ち始めた。

ふう、と一息ついた時、事務所の時計が0時50分を示していた。

体を伸ばし、誰もいなくなった暗い職員室を見渡すと、自分の席付近だけがライトで照らされている。

疲れたな。

コーヒーでもいれるか…。

俺は、椅子から立ち上がり給湯室へ向かった。

給湯室へ来ると、まるで強い力に引つ張られるように窓に視線が釘付けになる。

俺は操られるように、すりガラスの窓を開けた。ここ最近ずっと降り続いていた雨は、お天気オネーサンの言うとおり上がっていて、太ってきた月までくつきりと見えていた。

俺は腕時計に目をやる。

そして、次の瞬間、そのまま職員室を飛び出した。

学校を出たとたんに、冷たい風に体温を奪われる。防寒具を一切持ってこなかった、というよりそんなことにかまけている余裕すら今の俺にはなかった。冷気が俺の頬を容赦なく刺す。それでも、全力で走っていた。

最近の運動不足がたたって、体が重たい。
時計を見る。

0時53分。

あと7分！

1分でもいい。

1秒でもいい。

もう一度、あの笑顔を見たい。

君に会いたい。

そして 期待を希望に変えたい！

* 14 * ただ、それだけだから（後編）

「はあ……はあ……っ……み……お……」

その場所に必死でたどり着いた時、汗だくで息も絶え絶えになっていた。

もう、自分でも何を言っているのかわからない。

胸の鼓動がうるさい。

呼吸がじゃまで言葉が出てこない。

確かにそこには彼女がいた。

俺が数日何度も恋焦がれた、笑顔が出迎えてくれたのだ。

一気に体温が上昇したような気がした。頭も真っ白になる。

こういう時、勝手に体は動くものなんだ。

俺は彼女の体を力一杯抱きしめた。

全身の感覚器官という感覚器官が、彼女の体温や香り、呼吸、鼓動を一つも漏らさないように集中しているのがわかった。

不意に彼女が俺の胸の中で優しく囁いた。

「おかえりなさい」

俺はその一言で、一瞬にしてすべてが拭われた気がした。昼間受けた理不尽な仕打ちも、それをただ受け入れるしか出来ない状況下も。なんだか、ちっぽけなことのような気がしてきた。そして、同時にこう思った。

“おかえり”ってこういう時に使ったね。

こんなに暖かい言葉だったんだね。
こんなにほっとする言葉だったんだね。

「ただいま…」

自然にこぼれ出る言葉。

とくん。

とくん。

暖かな心地よい彼女の鼓動が俺の鼓動と重なる。

真っ黒な不満の雲がサンサンと輝くまぶしい太陽で吹き飛んだ、
そんな気持ちだった。

あんなにギスギスしていた自分から、笑みがこぼれることが不思議であり、同時に自然のような気もする。

心が軽い。

来てよかった…。

汗だくになって、くたくたな体に鞭打って、必死に走ってきただけのものを、もうすでに手に入れた気がした。

「ミオ…」

「どうしたの？何かあった？」

俺の様子にミオも気がついたようで、少し体を離し心配そうに俺を覗き込む。

「…いろいろと。でもミオの顔を見たら全部吹っ飛んだ」

安心させたくて、俺は笑顔を作る。

「もう元気になったの？」

「うん」

返事をしてから、自分の口からそんな返事が出てきたことに驚いた。

うん、だって……。思わず苦笑いしてしまう。

“ああ”とか“そうだな”とか“みたいだな”とか、普段なら違

う単語を使う。間違っても“うん”なんて言わない。

俺は、照れくさくて思わず視線を泳がした。でも、その様子をミオは見逃さなかったらしい。

「なあに？うれしそう」

ミオは笑顔で俺の顔をのぞき込む。

「……ミオの前では、俺はえらく甘ったれたなっと思って」

「え、そうなの？私はその甘ったれたな新くんしか知らないからなあ」

ミオはくすくすと笑った。

一緒になって微笑んでいた俺は、すっと真顔に戻ってミオの頬にそっと触れた。

「ミオ」

まっすぐミオを見つめる。

「なあに？」

名前を呼ばれたミオは、きょとんした顔でこちらを見ている。

俺は一呼吸置いた。

喉が、ごくんと鳴る。

そして、かみ締めるように、はっきりと告げた。

「好きだよ」

ミオの瞳が大きく見開いた。そしてすぐに満面の笑みになって。

「私も新くんが好きよ」

その一言で、小躍りしそうなほど嬉しいって言ったら、また君は可愛く笑うのかな。

でも、真実だから。

お馬鹿って言われても、かまわないよ。

ただ、君が好きで。

それだけだから。

二人はどちらからともなく、そつと唇を重ねる。

それがまるで合図だったように、音もなくミオは姿を消した。
やわらかな唇の感触とぬくもりだけを残して。

* 15 * 記憶のかげら

次の日、机の上にコトンと置かれたマグカップから漂う香ばしい
カフェインの香りで目が開いた。

「風邪引くわよ」

ぼーっとする俺の頭を大谷先生が右手で小突いた。

もう朝か…。

昨日はあれからまた職員室へ戻り、仕事を再開しいつの間にか寝
ていたようだ。

「顔洗った方がいいわよ。もう7時だから」

「ん…ありがと。相変わらず大谷は朝が早いな」

俺はコーヒーをすすった。

「なに言ってるのよ。いつも日付が変わるまで残業してる人が…」

彼女が少し声を低くした。俺を心配してくれてるからだといふの
はわかってる。

俺は肩をすくめるしかなかった。

俺は一度家に戻り、猫の世話をし、シャワーを浴びてすぐに職場
に戻る。

その日も家には帰れず、職員室で夜を明かした。

そして、3日目の夜。

「お、終わった……」

俺はへ口へ口と机に突っ伏した。

「もー今日は仕事しないぞ……絶対しない……」

思わず独り言がでてしまうほどに、俺は疲れ切っていた。

久しぶりにこれで、我が家のベッドで寝れる……というか、今何時だ……？

俺は自分の肩を揉み解しながら事務所の時計を見ると、0時半だった。

思わず窓の外を見る。

雨は降ってない。

間に合う！

疲れ切った体に鞭を打って、椅子から立ち上がった。

しかし、さすがに走る体力は残ってない。

でも、まっすぐ俺の足はあの桜へと向かう。そして堤防のところにとどり着いた時、桜の木の下でこちらに手を振るミオが小さく見えた。

それを目にしたとたん、俺の足が軽くなる。堤防を川原の方へ駆け下りた。

「おかえりなさい」

すると、俺を見つけたミオが駆け寄ってきた。

そしてふわりと俺の胸の中に納まった。俺はしっかりとミオの暖かな体を抱きとめる。

「……ただいま」

俺の胸をじんわりと優しい気持ちで満たしていくのがわかる。
ただいま。

俺はこうやって、ミオにどれだけ癒されてるんだろう。もう、ミオの笑顔なしの毎日なんて想像できない。

そう思った。

その時だった。

ほぼ同時に二人して、あれ？と顔を見合わせた。

「ミオ……！？」

「新くん……！」

無言のままに見つめあい、二人で同時に視線を足下につつす。

「私……歩けた……？」

「2歩だけど……木から前進してるよね、ミオ」

そうなんだ。

ミオはさつき俺の胸の中に駆け込んできたんだ。

あんまり自然な動作だったからすぐには気がつかなかったけど、確かにミオの体が2歩分だけあの桜の木から離れていた。

「……うん、あんなに前に進めなかったのに！」

「……よかった、のかな……？」

「どうなんだろう……？」

もう一度二人して難しい顔を見合わせて、ぷつ、と同時に噴き出した。

「久しぶりに会ったのに、歩けた、ってどうなんだろうな俺たち」

「ほんとだね！あははは！」

「ごめんな、急な仕事が入ってなかなか来れなかったんだ」

「大変だったね、お疲れ様」

ミオは手を伸ばし、俺の頭をなでた。

あれ？なんだこれ。子供扱いされてるのに、嫌じゃない。

……俺どうなってるんだ？

自分が彼女の前だと、別人になってるのがわかる。これがホント

の自分なんだろうか。

恥ずかしくなって、思わずミオから視線をそらす。その間もミオは満面の笑みで俺の頭をなでていた。

「もしかして…照れてる？」

そう言われて、はっとしてミオの顔を見る。そこにはニタリと得意げに笑ったミオの顔に、うつ、と言葉をつまらせる。

「あ、やっぱり照れてる！かわいいー！いい子いい子ー」

ミオは調子に乗ってさらに、しかも大げさに頭をなでた。

「……こんのっ！」

恥ずかしさのあまり、俺は少し乱暴にミオの唇を奪うという暴挙にでた。

突然のことに予期してなかったミオは小さく悲鳴を上げたが、そんなことは知ったことではない。俺は照れ隠しを強行したのだった。しばらく驚きのあまり固まっていたミオから、ゆっくりと唇を離して俺はニヤニヤと笑ってみせた。

「顔真っ赤、ミオちゃん可愛いー」

「……生意気っ！」

真っ赤な顔でミオが、俺の胸を軽く拳でたたいた。

「頑張ったご褒美はもらわないとね」

勝ち誇るように、ミオの柔らかな唇を人差し指で、ちょんちょんと突つつく。もちろんわざとミオの負けず嫌いなところを刺激させるために。

「もう！」

ミオは益々、頬を赤らめて頬を膨らませる。

そんなミオを眺め、俺は自然と口元が緩む。

かわいい。

もっとミオの表情豊かな顔を見たい。

素直にそう思った。

「ていうか、そもそも生意気って、ミオより俺のが年上にみえるけどね」

「……そうなの？」

「ん、ミオ20歳前後だと思うよ」

「新くんは23だっけか？」

「そ、よく覚えてるね。1月に23になったばかり」
不意にミオの顔が曇った。

「あたしいくつなんだろう。誕生日いつなんだろう……」
しまった……。

俺は心の中で舌打ちした。

「焦らなくてもいいじゃん。こないだちょっと思い出したんだから、また何か思い出すよ」

今度は俺がミオの頭をなでながらそう言ったが、その言葉はどうやらミオの耳には届いていないようだった。

「……私、桜の時期だったかも、誕生日」

ミオはどこか遠い目をしながら、ぼつりとつぶやいた。
「また思い出したの？」

ミオの顔をのぞき込むと、やはり考え込むように続ける。

「……桜の花と……」

ミオはゆっくりと桜の木を見上げる。

「……妹……？」

その言葉がミオの口からこぼれた瞬間、ミオは大きく目を見開いた。視線が中をさまよう。

「……ミオ？」

様子がおかしい。

俺の問いかけもミオの耳には届かない。

「……そう……妹が……いた……」

ミオの膝ががくがくと笑い出す。今にも腰が抜けそうなミオの腕

をつかんで支えてやる。

「ミオ!？」

だが、みるみるうちにミオの大きな瞳から涙があふれてきた。

「新くん……私……妹がいたの……どうして?……涙が止まらない

……」

「ミオ、落ち着いて」

震えるミオをどうにか落ち着かせようと、自分の方へ引き寄せようとした時だった。

え?

へなへなへなつとその場にミオが膝をつく。

今……ミオの体を手が通り抜けた……!?

数秒、呆然と自分の手を眺めていたが、はっ我に返って再びミオの肩を抱こうと手を伸ばす。しかし、それよりも早く、ミオの方から逆に俺の胸の中に飛び込んできた。

「新くん……私、思い出すのがこわい……こわいよお……」

ミオは俺の腕の中で震えている。

ミオの華奢な体を抱きしめながら、俺は呆然としていた。

今のは、なんだったんだ…?

その疑問が頭の中をぐるぐると回る。

漠然とした不安がおそってくる。その不安をかき消すように、泣きじゃくるミオを抱きしめる腕に力を込めた。

「俺がそばにいるよ。一緒にいい方法を考えよう……だから、泣かないで……」

俺はミオの頬を両手で挟み、笑顔を見せた。

ミオがその笑顔につられて、少し笑顔になる。

やっと笑ってくれた。少しほっとして、俺はそっと指でミオの涙

をぬぐう。

「笑って、ミオ」

ミオは涙でぬれた瞳で笑顔を懸命に作って見せた。

そして そのまま徐々に色を無くし……静かに闇の中にとけ込んでいった。

俺はミオの頬を覆っていた腕を、力なく降ろすしかなかった。いったい彼女はどんな大きなものをその細い肩に背負っているのだろうか。

自分に出来ることは何かないのだろうか。

いつの間にか咲いた桜の花びらが、俺の目の前を儚げに舞う。

桜が泣いている。

俺にはなぜか、そう見えた。

「……ミオ……」

かすれた声が、春を告げる風に乗って河の方へ運んでいく。

風が指をかすめた時に、一指し指にミオの暖かな涙が残っているのはつきりと感じた。

胸が締め付けられるように痛い。

ねえ、ミオ。

そろそろ、君が目の前で消えていく姿を見るのは限界なんだ。

さっき一瞬感じた不安。

君に触れることがなくなる日が、遠からず来るのかな……。

君が俺の前から消える日が…来るのかな……。

このままでいられないことは、わかってるんだ。

ただ、今は。

もつと君と一緒にいたい、それだけなのに。

それがこんなに難しいことだなんて思わなかったよ。

* 16 * サクラサク

何も見えない。

目を開けても。

閉じていても。

そこはどこまでも続く真っ暗な世界。

深い。

深い。

闇の中。

私は…なぜここにいるの？

誰かいらないの？

助けて…

助けてっ！

誰か返事をして！

当たりを見回しても、誰もいない。

何もない。

突然、体に寒気を感じて私は身を縮める。

「嫌……こないで……」

やっとの思いででてきた声は情けないほど震えていてさらに恐怖が襲う。

全身が震える。

立ってられない。

私はその場にへたり込んでしまった。

怖い！

何か嫌なものが近づいてくる！

何かわからないけれど…

すごく嫌なものがゆっくり迫ってくる！

「助けてっ！」

私はその恐怖から逃げようと、何とか立ち上がって走り出す。

前に進めているのかどうかわからない。

でも走った。

迫りくる恐怖からできるだけ遠くに、本能的に走った。

「いやー！ーっ！」

助けて！

こっちにこないで！

捕まったらいけない。なぜかわからないけど、捕まったら私は私
でいられない気がする。

怖い！

誰か！

誰かつ！

誰か助けてっ！

ふと、目の前にぼんやりと淡い小さな光が見えた。
迷わずその光に手を伸ばす。

すると、触れた光が一瞬にして眩い閃光を放った。
耐えられずに目を閉じる。

目を閉じているのに、まぶたの裏が赤く見えた。

「ミオ!？」

不意に優しい声が耳に届いた。

ゆっくりと目を開けると、そこには心配そうに覗き込む青年の顔があった。

その青年の顔を見て一瞬にして私の体から力が抜けるのがわかった。

へなへなと地面に座り込んでしまう。

だって、もう大丈夫だから。

なぜだか分からないけど、そう思った。

そんな私の肩を、青年の大きな掌が少し強く揺さぶる。

「ミオっ!？どうしたんだっ!？」

両肩から彼の掌のぬくもりを感じた。

見上げると彼の肩越しに、満開…とまではいかないが、ピンクに染まる桜の木が目に入った。

「桜…咲いたね…」

少し間をおいて、優しい彼の声が聞こえた。

「ああ、綺麗だ…」

本当に綺麗。

私が青年が視線を戻すと、いつの間にかあふれた涙で彼の顔がにじんだ。

「新くん、会いたかったよ…」

彼の手を自分の頬へと運んで。
心を込めて。

「会いたかったよ…」

ずっとあなたを私は待っていたのかもしれない。

この桜の木の下で。

「ありがとう」

ありったけの心を込めて伝えよう。

今の私が持つてるのはこれしかないから。

あなたを思う気持ち。

あなたへの感謝の気持ち。

「新くんに出会えてよかった」

あなたは私に色をくれた人。

あなたの周りだけ、鮮やかな色がある。

真っ黒な闇から、あなたは私にこんなにたくさんの色をくれた。
。

彼は私の頬を流れる涙を拭いながら、何ともいえない表情で私を見つめ返した。

言葉はいらなかった。

このまま、抱きしめていて。

今が永遠でないなら。

できるだけ長く…。

また、私があなたのところへ迷わずに帰って来れるように。

今はこのまま……。

* 16 * サクラサク (後書き)

ここまでお読みいただきありがとうございます。

感想・叱咤激励・読んでます！の報告等お気軽にお願いします。

さあ、物語はあとは転と結です。ハッピーエンド目指して頑張ります！

* 17 * 桜日和

それから、俺は仕事が終わると川原に立ち寄るのが日課になった。もちろん、雨の降っていない日に限り、である。

世の中は新学期となり、我が高校でも新入生を迎えた。今年は、授業でも1年生と関わることはない。それでも、真新しい制服に身を包み、まだ幼い笑顔の1年生を校舎で見かける度にほほえましく思う。

彼女にも、あんな時期があつたのかな。楽しそうに廊下を歩く女生徒を眺めてそう思うのだ。

その夜も、俺は午前0時に遅れないようにその桜の木の下に向かった。

運良く、雨は降っていない。

川原の桜並木はすでに8分咲き。

こんなに綺麗に咲いてたのか。

今更ながらここ数日、桜を見やる余裕すら持てなかった自分に苦笑する。

忙しさもさることながら、目に入ってたんだらう

“他のこと”に夢中で。

そしてたどり着いた。一際大きな、見事な桜。

その枝は大きく横に広がり、濃い茶色の幹に淡いピンク色の小さな花々が枝と枝の隙間を埋めるように咲き乱れている。月明かりに照らされて、花びら一枚一枚がまるで自分たちの美しさを競うよう

に、誇らしげに自分を魅せている。そして川からのそよ風に誘われるように、花びらは舞うのだ。

綺麗だ。

なんと表現していいのか分からない。
言葉なんて無力だなと思ってしまう。

しかし、その花々に見とれながらも、そこに現れるはずの“もつと綺麗なモノ”に期待をしそわそわする。今まで桜と一緒に眺める時間も余裕もなかった。今日は時間もたっぷりあるし、月も綺麗に出ている。絶好の花見日和だろう。

きつとミオと眺める桜は、もつと鮮やかで美しいに決まっている。そう頬を緩ませて、俺が桜木にも背をもたれさせる。ほどなく足元に座り込むミオが段々と浮かび上がってきた。

来た来た。そう俺が胸を高揚させたのも束の間、一瞬にして異変に気がつく。

明らかに、様子がおかしい。

彼女は、小刻みに体を震わせて、焦点の合わない視線を地面に向けていた。顔が真っ青だ。

「ミオ!？」

どうしたんだ!?

いったい何が!?

焦る気持ちから、知らず知らず彼女の肩を強く揺さぶっていた。しかし、彼女から返事はなく、ただ呆然としたまま彼女の視線が自分を通り過ぎ頭上に向いた。

「桜…咲いたね…」

か細い声でミオはそう言った。彼女の瞳は確かに涙であふれ、そ

の頬は濡れていた。彼女がそつと瞬きをするたびに、涙の雫がこぼれ落ちる。

何で泣いているんだるう。

何があつたんだるう。

俺の中をどうすることもできない、何もしてあげられない、そんな不安がいつぱいに広がっていく。

彼女は静かに涙をこぼしながら微笑んでいた。

何かあつたのは確かなんだ。でも、今は桜を見上げながら…微笑んでいる。

ミオ、君はなんて顔で桜を見上げるんだ。

俺は、そのミオの寂しげな表情に釘付けになっていた。その表情で胸が締め付けられる痛みを感じた。

目頭が勝手に熱くなる。

涙がこぼれそうなのを隠すために、ゆっくりと俺も桜の花に視線を向けた。

ミオの横顔越しに、一面の桜の花々が見えた。

桜に抱かれている　　そう思つたんだ。

「ああ、綺麗だ…」

俺は心から素直に、そう口にした。

ほらね。

やっぱりだ。

君と一緒に眺める桜は美しい。

俺が今まで見た、どんな桜よりも美しい。

でも、きつと君はわかってないだらう。

この桜よりも、君の方が何倍も綺麗だ。

不意にミオが俺に視線を戻した。そしてゆっくりと、俺の手を取り、そっと自分の頬に運ぶ。自然とその動きを目で追っていた。

「新くん、会いたかったよ…」

ミオが笑顔で続ける。

「ありがとう」

目が離せなかった。

時間が止まっているのではないかと錯覚するくらい、美しい、と思った。

舞い散る桜の花びらと。

ミオの笑顔と。

風に揺れる黒い髪と。

月明かりに光る頬の雫。

俺はこの時の眼に映った風景を一生忘れないだろう。

そして、ミオはまるで一言一言にありったけの気持ちを込めるようにこう言った。

「新くんに出会えてよかった」

言葉にできない気持ちでいっぱいになった。
だから力まかせにミオを抱きしめた。

愛しい。

この気持ちを、愛しい、と呼ぶ以外になんて呼べばいい。
いや、呼び名なんて本当は、どうでもいい。

俺はミオのぬくもりを、存在を、かみしめるように、そして、確かめるように、腕の中にミオを抱きしめていた。

あと10分か。

俺は携帯の時計を確認してから地面に座り込み、両足を広げ桜木に背をもたれさせた。そして、ミオに、こっちへおいで、と手招きをする。

ミオは一瞬、恥ずかしそうに戸惑いながら、でも、俺の両足の間に座り、俺の胸に背中を預けた。その様子を微笑ましく思いながら後ろからミオをすっぽりと抱きしめる。

「ミオ…俺、明日から会えないんだ」

俺はミオの背後からそう切り出した。

「え!？」

勢いよくミオが後ろを振り返った。そのミオに短くキスをする。

「明日からしばらく忙しくなるんだ」

「……そっかぁ。お仕事じゃ、しょうがないよ。体調第一だよ!」

ミオは寂しそうに笑った。その表情に逆に胸が苦しくなった。

「ごめん」

「いつも私思ってたの。新くん、ちゃんと寝てる?」

「……一応寝てるよ」

「一応?」

ミオは少し怒ったように頬を膨らませた。

「…4時間くらいは」

「駄目。ちゃんと睡眠時間を確保してください。その上で私に会い

に来て下さい。じゃないと私はちつとも嬉しくないよ」

「……俺が会いたいから来てるんだけどな」

俺がぼやくと、ミオは今度は真剣なまなざしで、こう続けた。

「体、大事にしてよ。……生きてるんだから」

俺は言葉を失った。

そうだね。

健康な体を大事にしてやらないといけないよね。そうできるのは俺しかないんだし。

「分かった？」

ミオは笑顔に戻ってそう言った。

「うん。ごめん」

「分かればよろしい！」

ミオは俺の頬を軽くつねってみせた。それはミオに殴られるよりも痛く感じた。

「それに私も頑張っと思って出してみようかなって思ってるの」

そう言ったミオは、下唇を少し噛んで前方を見据えている。

その決意はさっきの涙と関係があるんだろうか。

何があつたのかは教えてくれない。

何かを覚悟したのも教えてくれない。

でも、頑張ると前を見据えた彼女を応援してやりたい。

だから俺は、観念したように続けた。

「そっか。無理するなよ」

「うん」

「焦っていつぺんに思い出そうとするなよ」

「はい」

「夜、俺以外のやつがここにきたら、隠れるんだぞ」

「今まで新しくん以外ここで会ったことないよ？」

「今まで無かつたからといって、これから無いとは限らないだろ

う？とにかく、誰かきたら隠れるんだぞ？」

「でも……」

「でもない」

俺がまるで子供に言い聞かせるようにムキになって窘めると、ミオはぷつと吹き出した。

「……なんだよ」

「なんでもないです。了解しました、隠れます」

小ばかにしたような笑い方が気に障るが、俺はさらに続ける。

「それから、調子にのって、ここからフラフラ歩き回るなよ」

「まだ歩けないよ」

「歩けたらやるだろう、絶対」

「……」

「……不安だ」

「歩き回りませ〜ん……たぶん」

「たぶん!？」

「いえ、絶対です隊長!」

「うむ。っていつから俺は隊長になったんだよ」

「あははは」

俺は笑いながらミオのおでこをぺちつと軽く叩いた。

「それから……」

「まだあるの!？」

まだ思いつくままに何か言おうとした俺をミオが遮った。

「大丈夫だよ」

「……ほんとだよ。大丈夫な根拠がみあたらん……」

「大丈夫だったら!も〜心配性だな〜、新くんは」

ケタケタとミオは笑った。

少しやりすぎたかな、と内心では舌を出し、俺はミオから視線をそらした。

心配でしようがないのは確かだ。自分のいない間に、彼女に何かあったらと想像しただけで、心がざわつく。おそらく、彼女の異常

事態と聞くや否や、身内の不幸をでつち上げて『急用で帰ります！』とかなんとか言いながら、飛んで帰ってきそうな自分がいる。おかしい。こんなに心配性ではなかったはずなのに。彼女の存在が、自分にそうさせるのだろ。う。そうに決まっている。

俺は勝手に長々と自問自答して、そして、観念したようにもう一つの導き出された答えを自白した。

「……単純にね、俺が君と会えないのが淋しいだけみたい」
照れているのを隠す時、俺は急に真顔になるらしい。

そんな俺の頭を、ミオは笑顔でぽんぽん、と軽くたたききつと照れたのはバレてる。ミオは何でもお見通しなんだ。
「落ち着いたらまた来るよ」

「うん、お仕事頑張つて！しっかりね」
「うん、ありがとう」

そして二人はゆつくりと、お互いの存在を、気持ち、確かめるように唇を重ねた。

「ん……」

「え？」

「足りない！もう一回……」

「新くんの甘えんぼ！」

「やかましい。そんなことを言うのはこの口か！」

「きゃーー!!」

君に出会って知った。

時間の大切さ。

一分一秒無駄にできないそんな大切な時間。

こんな幸せな時間が続かないのは、お互いにわかっている。
だからこそ、永遠よりも長く大切な、束の間の幸せ。

君のその笑顔が、この桜華乱舞に溶けるまで

。

* 18 * 女のカン（前編）

あの日から2週間、仕事に忙殺される毎日が過ぎた。

給湯室の窓から見えるあの桜の木が目に入るたびに、彼女の顔がちらつく。

ミオに会いたい。

こないだあんな事があつたばかりなのに、彼女は大丈夫なのだろうか。

危険な目にあつてないだろうか。…とはいっても幽霊に命の危険があるのかどうか分からないが。

そもそも本当に彼女は幽霊なのだろうか。

考え始めると、止まらない。

「松本先生」

「はい、今行きます」

が、すぐに現実に戻される。

もともと自分で仕事を増やしていた自覚があつたがために、自分の首を自分で絞める感覚だ。こうなると仕事が邪魔だな、と思ってしまう自分にも嫌気がさす。

ミオに会いたい。

日に日にその気持ちは増すばかりだ。
そんなある日。

「松本くん、彼女できたでしょ？」

休憩室で一緒になった大谷先生に突然そう言われ、飲んでいたコーヒーを噴出しそうになる。

言葉を失って大谷先生を眺めると、やっぱりねと彼女は笑った。
「春休みあたりから、松本くん様子がおかしかったもの。最初は生徒のことで悩んでるのかと思ったけど、途中から違うなってピンと来た」

「……………ピンとねえ」

「女のカンてやつね」

それは知ってる。世にも恐ろしいのが女のカンだ。
理由もなく、ただなんとなくそう思った、と言つわりに鋭いところをぐつさり突いてくるのが特徴。

こういう時は、なすべがないのが男だ。

「まさか生徒じゃないでしょうね、相手」

大谷先生は小声で恐ろしいことを言う。俺にそんな趣味はない。

「勘弁してくれよ。そんな分けないだろう」

俺がため息交じりにそう言いコーヒーを飲もうとした時、得意げな「あ、やっぱり彼女できたんだ」という大谷先生一言に、固まるしまった……………。

こんな初歩的な誘導尋問に引つかかるとは…。

「そうかそうか、松本くんがね。仕事が彼女なのかと思ってたよ。なんか今までより親近感かな」

どういう意味だよそれ……………俺を仕事マシンみたいに……………否定できないか。

確かに今までは、プライベートの時間を作るつもりなんて更々無かったからな。

だって、必要なかったから。むしろ、仕事以外のことを考える時間が必要なかった。

その名残で今、膨大な仕事量に身動き取れなくなってるわけだけど。

「松本くんも普通の23歳だったか」

「何だよ、それ……」

「んで、女のことは女に相談するのが早いわよ。何か悩み事でしょう？」

どうしてそんなに嬉しそうなのかよく分からないが、確かに大谷先生の言うことは一理あるなと思う。思うが、どこから相談したらいいの分からないし、信じてもらえる筈もない。

「大丈夫だよ、ありがとね」

だから、やんわりと申し出を断った。

「何、言えないような相手なの？」

が、どうしてこう女性というのは、恋愛話が好きなんだろうか。大谷先生が、このまま俺を開放してくれるわけは無かった。

だから俺は忙しいんだってば……。とっとと仕事を片付けて、1分でもミオに会う時間が作りたいのに……。

俺が黙っていると、彼女は質問を積み掛けてくる。

「まさか、ホントに生徒じゃないでしょうね？年は？」

「……二十歳くらい」

「くらい！？くらいって何よ」

だって、本人も知らないんだからどうしようも無いじゃないか。

「どこで会ったの？」

「……………川原？」

「はあ！？」

「……………声でかいって」

そこで我に返って口を押さえる大谷先生だが、後の祭り。休憩室にいた他の先生方がこつちをジロジロ見ている。

「何それ！ナンパ？今時ナンパ！？松本くんナンパしたの！？」

再び小声に戻ってはいるものの、大谷先生の頭の中の暴走は止められないようだった。

なんかもう、どうでもよくなってきたぞ。

「川原で見たけた女の子に声掛けられて、仲良くなったわけ。」

「逆ナン！？」

「まあ、似たようなもんじゃないの？」

再び大きな声で叫ぶ大谷先生を放置して席を立ち、コーヒーを飲むのに使っていたマイカップをすぎ始めると大谷先生もわざわざ移動して話を続ける。

「ねえ、大丈夫？変な女にひっかかってるんじゃないの？人に言えないような相手は私どうかと思うけど……」

その一言に無性に腹が立った。

君に何が分かるんだ。

そう言いたかった。

俺のミオを思うこの気持ちも、胸を締め付けるような苦しみも。

俺のものであって、君のものじゃない。

君のものさしではからないでほしい。

しかし、俺は無言で蛇口を止め、カップを食器洗いカゴに置くと笑顔でこう告げた。

「そうかもしれないな。でも心配してくれてありがとう。じゃ、俺そろそろ仕事戻るわ」

* 19 * 女のカン（後編）

俺が休憩室を出て廊下を歩き始めると、近くでバサバサつと音がした。思わず振り返ると、生徒が派手に手荷物を廊下一面にぶちまけてしまっていた。

「うわ、まだサイアクー」

ブツブツ言いながら隣の女生徒と一緒に荷物を拾い集める。

俺も足元にあるルーズリーフやら筆記用具やらを拾い集めるのに手を貸した。

そして……その女生徒の手帳を拾い上げようとした時だった。

！？

俺はその手帳の一面に張られたプリクラ写真の一枚を凝視していた。

「先生？どうしたの？」

その手帳の持ち主が荷物を受け取ろうと俺を不思議そうに覗き込む。

「あ、ああ。ごめん」

俺は立ち上がって笑顔で取り繕うとした。でも無理だった。

「ありがと」

荷物を受け取って立ち去ろうとする女生徒。

まさか……いやでも……。

遠くなる女生徒の背中を見つめながら躊躇している自分を感じる。知りたい。

でも知りたくない。

でも……

「君！」

次の瞬間、俺はその生徒を追いかけて声をかけていた。

「君、ちよつといい？」

突然声を掛けられて生徒は驚いている。

「はい？」

「ごめん、ちよつと今のプリクラ写真に知ってる顔があつたからさ、あれゝつて思つて」

「え？まぢですか？ええ、どれどれ？」

「ちよつと見せてくれる？」

「いいですよ？」

そのこは授業でも受け持ったことのない面識のない生徒だったにもかかわらず、嬉しそうに手帳を見せてくれた。そして、もう一度そのプリクラ写真を眺める。その写真には、10人以上が器用に映り込んでいる。

やっぱり似てる！

この写真に写っているのは……

ミオなのか！？

「この子なんだけど……」

俺はその写真を指差してその子に見せた。

「ああゝ部活の先輩ですよー！」

「部活？今何年生？」

なんだつて？

この学校の生徒なのか？

俺の心臓が急に2割り増しで鼓動するのが分かる。

「もう卒業した。だよね？なんて名前だっけ？」

「え、どの人？…ああ、武ちゃん先輩じゃん」

「あゝ！そうそう！武ちゃん先輩だゝ！うちらが1年の時の先輩でゝ、だからこれ2年前のプリクラかあ。うちら若くない？ほらっ！」
「ほんとだゝ！若いゝ！っていうか、よくこんなの取ってあったねゝ！」

「たまたま貼ってあったゝ」

もう二人で話し始めている女生徒たちの会話をそこそこに、俺の頭には「武ちゃん先輩」なる単語がぐるぐると回っていた。

2年前に卒業したってことは、今20歳！？

背筋がぞくつとした。

こんな偶然があるのだろうか。

「あ…あのさ」

思わず声が上ずる。

「確認なんだけど、2年前にうちを卒業した子なんだよな？」

「うん」

二人は同時に頷いた。

「これだって、3年の引退の時に料理部で撮ったプリクラだもん。ねゝ？」

「うんうん」

「名前は？」

「えゝ名前？フルネーム？…なんだっけゝ？武…武…」

「えゝ覚えてないゝ何だっけ？だって1年しか一緒にいないしいゝ。ねえゝ？」

「だよねゝ？」

1年一緒に居たら覚えるだろう、普通。この人数しか居ない部活なんだから。

そう突っ込みたいのを苛立ちとともに押さえ込む。

「そっか、分かった。ありがとうな」

あとは自分で調べよう。うちの学校の卒業生だったなら探せるはずだ。

たしかにあの写真がミオな確証はどこにもない。自信だってない。しかも、プリクラの小さな小さな顔を見ただけだ。

でも、他人のそら似で無駄骨かもしれないが、万に一つってことだっただけではないか。

あんなにミオに似ていたんだ。

何かわかることがあるかもしれないじゃないか。

ミオの記憶を取り戻すきっかけになるような、何かが。

俺は再び廊下を歩き始めた。

20 運命の系（前編）

「そついえばさ、大谷先生は料理部の顧問だったよね？」

俺はさりげなさを装って、休憩室で大谷先生を捕まえた。

「そうだけど？」

「2年前の卒業生で武なんとかっていう子知らない？」

「2年前？」

当然着任2年目の俺たちがこの学校の教師になる前の卒業生だ。

入れ違いになっっている生徒のことを知っているとは思えないが、何かの取っ掛けになればと話を切り出してみることにしたのだ。

眉間にしわを寄せて俺を見る大谷先生の反応はやはり、俺の予想どおりだった。だから、俺はあらかじめ考えていたもつともらしい理由を説明し始めた。

「そう。俺らが着任する前の卒業生なんだけどさ。さっき料理部の三年生とすれ違ったときに、ホントに偶然、その子の写真を見たんだ。もしかしたらその子ずっと探してた子かもしれないか思ってた」

「探してた？」

「俺の幼馴染の女の子。よく近所の公園で一緒に遊んだ友達のうちの一人なんだけど。確か3つくらい年下だった気がするんだよね。

突然引越してちゃったらしくてさ。名前も覚えてないし、でもすごい面影があつて、もしかしたらと思っただんだ」

無理やりなこの話、大谷先生は鵜呑みにするだろうか。

しかし、俺のカンだと意外とこの大谷女史は天然なところが多分にある上に、この手の話は大好物だろうという希望的観測もあり、いけると判断したのだった。

当然、内心ヒヤヒヤものだ。

「その子、確か病気だとか何とか言ってたからさ。なんだかずっと気になってるんだよね」

「ふゝん。幼馴染の女の子か」

恐る恐る彼女の顔をうかがう。なんだか遠い目をしている。

「生徒に聞いてみようか？3年生だったら覚えてるかもしれないしね」

よしっ！

俺は心の中でガッツポーズをした。

「そうしてもらえたら嬉しいかな。暇なときでいいからさ」

「うん、でも忘れちゃいそうだから今日の部活で聞いてみるよ」

彼女のこういうスピーディーなところが周囲に信頼と好感を持たせているのだろうと改めて思った。見習うべくところだ。

「ありがとう。じゃーせつかくだから今日一緒に部活に覗きに行ってもいいかな？」

「あ、そうだね！そのほうが早いじゃない。そうしなよ」

「そうさせてもらうよ。じゃあ、後で」

俺は心臓が早まるのを抑えることができなかった。

なんとという予想以上の展開の速さだろう。

これで本当にミオ自身だったら！？

これはもう、神様が俺にあの写真はミオだ、と告げていると誤解してもおかしくないくらいの展開じゃないか。
できすぎてる。できすぎてて怖いくらいだ。

あまり期待するな、と自分に言い聞かせるもどうしても期待が大きくなってしまふ。

放課後までが、また長く感じそうだ。

俺は逸る気持ちを周囲に必死に隠すしかないのだった。

そして待ちに待った放課後。大谷先生と連れ立って料理部の活動場である調理室を訪れた。

珍客に驚いた生徒たちの視線を一身に受ける。その中に、今日写真を見せてくれた生徒の顔もあった。二人は、あっという顔をしている。

「あれゝ先生なんで来たのゝ？」

「うちの手料理食べにきたわけゝ？」

その二人はこちらに、にこやかに手を振っている。

俺が答えるより先に大谷先生が口を開いた。

「篠崎さん、本田さん、高田さん、神崎さん。ちょっと聞きたいことがあるんだけどゝ」

4人は作業をやめて、エプロン姿でこちらに集まってきた。

俺は例の二人に手帳の写真をもう一度見せてくれるよう頼むと、その写真の人物を改めて3年生の4人に問う。

「あ、優希先輩だ」

神崎という名の生徒が即答した。すると他の生徒も口々に、そうだぞうだと言い出す。

「覚えてるの？」

俺は平常心を保つのに必死だった。

「仲良くしてもらいましたから。すごい優しくていい先輩でしたよ。料理も得意で、ぱぱっと何でもできちゃうんです。しかもゝプロ並っ！」

「そうそう。めっちゃおいしかったよねゝ」

しばらく4人は優希という少女の思い出話を聞かせてくれた。

名前は、武山優希。たけやまゆき

おっとりしていて、いつも笑顔で後輩想いだったこと。

彼女が部活にいた時は、毎回食事が豪華で楽しかったこと。

勉強はあまり得意ではなかったらしいこと。

ちよつと天然だったこと。

一つ一つのエピソードを聞けば聞くほど、この武山優希がミオなのではないかという想いが強くなる。

しかし、数分後、一同がぎよつとすることとなった。

急に神崎さんがうつむき、泣き出したのだ。

「ど、どうしたの？」

「舞ちゃん!？」

いっせいに生徒たちが神埼さんを心配そうに覗き込む。今の今までそれは楽しそうに、武山優希の話をしていたのだから当然の反応だ。

ついに、神崎さんは隣にいた高田さんの胸の中で嗚咽を漏らし始めた。

「舞ちゃんゝ泣かないで。どうしたの？」

一同はわけが分からないまま、神崎さんが落ち着くのを待つことになった。

「……ごめんなさい、急に泣いたりして。ほんとに私、先輩が好きだったから」

やっと泣き止んだ神崎さんは、ぽつりぽつりと話始めた。

が、その次のセリフに、再び調理室が凍りつく。

「先輩は…卒業したあとすぐ亡くなったんです」

* 21 * 運命の系（後編）

それは期待していた通りの結末。

探していた結末なのに、頭を鈍器で殴られたような感覚を覚えた。

そうだよ。俺は何を期待していたんだ。

最初から分かったたことじゃないか…。

彼女が初めて会ったときに言っていたじゃないか。

“私もしかして死んじゃってんのかなって思っのね”

そう言っただじゃないか。

そして何よりも、その事実こそが武山優希がミオだと示している
ようなものじゃないか。

…それでも、どこかに期待してたんだ。

生きてるかもしれないって…。

だって、あんなに暖かな体温を持っでいて。

心臓だっでちゃんと動いていて。

俺となんら変わらない。

何一つ変わらないように思えたんだ。

あの桜の木の側にしかいられないことや、1時間しか存在できないことを除いて……。

いや、分かっていたはずだ。

“俺と何一つ変わらない”？

1時間で消えてしまうことが？

桜の木から動けないことが？

俺は突きつけられた真実に胸をえぐられるほどの痛みを受けていた。

この先の真実を聞くのが怖い。

真実を知ってしまったえば、いずれミオの存在を否定することになるのではないだろうか。

知らない方が……知らないままでいれば……このままミオと何も考えずに一緒に居られる……？

俺はその自分の考え方に苦笑した。

また、逃げるのか。

また、現実から目をそらすのか。

また、同じことを繰り返すのか。

いつまで同じところにいるつもりなんだ俺は。

もつと強くなろう。

君を受け止めるために。

君の“すべて”を、君と一緒に受け入れるために。

君のために俺は強くなろう。

「先輩……」

やっと俺はそこで他の３人の３年生のすすり泣く声が耳に入ってきた。

「そうか…卒業してすぐに…」

「病気だったの？」

大谷先生がそこで口を開いた。

俺がさっき病気だったという話をしたからだろう、と彼女の思考経緯を推測する。

「いえ。確か交通事故だったはずです。でもすごく綺麗な顔で、眠ってるみたいだった…」

俺の脳裏にミオの笑顔がよぎる。

「お通夜に行ったの？」

半分以上頭が使い物にならない俺の代わりに大谷先生が質問してくれる。

「……はい」

そう小さく答えると、また神崎さんはその時のことを思い出したのか、涙をこぼした。

「そつか……辛いことを思い出させてごめんな」

俺は神崎さんの頭をそつと撫でた。

「もしかしたら、その子、俺の幼馴染かもしれない。もしそうだとしたら……俺も線香あげたいな……」

２年の間に引っ越していなければ、と神崎さんは快く携帯に記録された武山さんの住所を教えてくれた。

ミオ。

本当に急激にこんなに君を近くに感じるんだ。
もしかしたら君に手が届くかもしれない。

22 心の湧き水（前編）

その日俺は職場を0時前に出ることができた。

明日はやつと休日らしい休日を迎えることができそうだ。約一ヶ月ぶりの自由な時間に、仕事のことで張り詰めていた気持ちが一気に緩む。

武山優希という少女の存在を知ってから、ますますミオに会いたい気持ちは膨れ上がる一方だったが、なぜか同時に忙しさも増すばかりだった。

やっと時間ができたと思えば、世の中は大型連休のニュースで持ちきりだ。

きつと彼女がミオでなければ、なんでこんなに会う時間作れないのよ、とか言われてフラれている気もする。いや、実際ミオにもフラれているかもしれないな、こんな1ヶ月近く放置するような男なんて。

苦笑しながら、俺は川原に向かった。

時計は23時55分をさしている。

俺は桜の木を背に、すっかり緑の葉をつけた桜木を眺めていた。

あと5分。

あと数分で君に会える。

胸が躍る。

君に会いたい。

君の笑顔が早くみたい。

なんて長い5分間なんだろう。

何度時計を見ても、20秒くらいしか針は進んでない。
待ち遠しい。

心臓が勝手に強く早くなっていく。

そして

ゆっくりと俺の待ち望んだ姿が映し出されていく。知らずに息を
飲んで、俺はそれを見つめていた。

「新くん、おかえりなさい」

月明かりに照らされた彼女の笑顔は、この世の何物にも勝る。

俺は本気でそう思った。

どれほどその声が聞きたかったことか。

どれほど君を抱きしめたかったことか。

狂おしいほど、俺は君だけを望んでいる。

この気持ちをどうやって伝えよう。

俺が知ってるどの言葉を使っても、到底足りない気がする。

半ば見とれて呆然とする俺に、ミオが微笑んだ。その瞬間、俺の心にふわりとやわらかくて暖かいものが入り込んできて、そして全身に一瞬で広がったのがわかった。

すごいね、君は。

君のその笑顔が、こんなに俺の心を軽くする。

仕事の疲れも、不満も、愚痴も、全部どこかに飛んでいってしまふんだ。

ミオはそつと俺に近寄り、俺の腕の中に収まった。

俺は、1ヶ月ぶりの温もりをしっかりと体中で受け止めた。

そして噛みしめるようにやつと……。

かすれた声でなんとか……言葉をミオに届けた。

「ただいま、ミオ」

俺は、ミオの存在を全身で確かめるように強く抱きしめた。ミオもすっかりとそれに応える。

「会いたかったよ」

小さく震えながらミオは言つと、ぎゅつと俺の背中に回した手に力を込める。

俺も言おうとした。

俺もずつと会いたかった、と。君のことを思い出さない日はなかった、と。

しかし、そんな月並みなセリフでは足りないんだ。

だから俺は、ミオを抱きしめる手にすべての気持ちを込めた。

愛しい。

知らなかったよ、君に会うまで。
心って液体だったのか。

こんなに泉のように後から後から気持ちちは溢れてくるものなのか。

俺は自然と口にしていた。
初めて使うその言葉を。

「愛してる、ミオ」

ミオの体がぴくりと反応したが、何も言わなかった。
それでよかった。

俺もそれ以上何も言わずに、静かに涙するミオをしばらく抱きしめていた。

どのくらいだったのだろう。

「新くん…痩せた？」

その言葉に少し体を離してミオの顔を見ると、頬を膨らませていた。

心配して怒っているのだろうが、俺の色ボケメガネには可愛いなあ、としか映らず、つい笑みがこぼれる。

「何笑ってるの!？」

それを見た彼女が、ますますフグのように膨れた。

俺はますます笑顔になる。

だめだ、可愛いすぎる。

俺は彼女の膨らんだほっぺたを突つついた。そして何か抗議しようとした彼女の口を自分の口で塞いだ。

「……っ！」

初夏の風が二人の髪を優しくなでていく…。

唇を離すと、ますます頬を膨らませて真っ赤になる彼女の顔が見え、俺はだらしのない顔でにやけているのが自分でもがわかった。

しょうがないではないか、惚れた女とキスをして喜ばないのは男ではない。

そんな変な言い訳を自分にしていた。そうすることで、冷静さを保とうとしているのかもしれないかった。

「このところ無理して働いたかな。ごめん、でも俺、体は丈夫だからなかなか壊れないよ」

「ヤダ」

「……以後気をつけます、無理しないように善処いたします」

「っーん」

彼女はそっぽ向いたまま、でも俺の腕の中からは離れようとせず、がっちり自分の腕を俺の背中に回している。

怒ってるんだろうけど可愛いから……つい虐めなくなるんだよね、全然分かってないだらうけど。

俺は思いついた意地悪を実行に移すことにした。

「ミオ…せっかく会えたのに…顔見せてくれないの？」

俺がわざとしょんぼりした声をだしてみせると、とたんにミオは慌て俺を振り返った。そして、俺のニヤニヤと勝ち誇った顔を目の当たりにするはめになり、たちまちミオの顔が真っ赤に染まった。

「騙したわねっ！」

「正直に言っただけデスヨ。人間きが悪いデスネ」

おどけた声をだした俺に、ミオはいよいよ恥ずかしいやら、悔しいやら、といった顔をして、拳で俺の胸をポカポカと叩いた。

「むきー！許せないっ」

そう言っただけは背伸びをして勢いよく俺の唇を奪った。

一瞬何が起きたのか俺には分からなかった。情けないことに、真っ白になっていた。

自分からミオがこんなことをするのは初めてで頭がクラクラする。俺は全身の感覚が唇だけに集中するのがわかった。

唇を少し離して、どうだ、参ったかと言わんばかりのミオの顔に俺は呟いた。

「……それ……逆効果だから」

「え？」

この後、ミオは俺に唇を塞がれ、しばらく話すことを許してもらえなかったのは言うまでもない。

* 2 3 * 心の湧き水（後編）

「あれから何か思い出した？」

俺の問いに、ミオは何も言わずに首を横に振った。ミオは例によって座ったまま俺に後ろからすっぽり抱きしめられている。

「あのね…偶然わかったことがあるんだけど、聞きたい？」

「え？ほんと？聞きたい！」

ミオは即答した。

「実はさあ……」

そう俺が言うと、ミオは体の向きを変えて俺と向き合った。

大きな瞳が俺を見つめる。吸い込まれそうだ。再び俺の視線はミオの唇に釘付けになる。

麻薬だな、と俺はその誘惑に逆らわずに短くキスをした。

「…俺の職場で、君によく似た子を見つけたんだ」

「職場って？」

「すぐその高校だよ。俺はその教師をさせてもらってます」

「先生だったんだ？」

「実は先生だったんです。んで、その子は料理部に入ってる……」

「…料理？」

首をかしげるミオに、あれ？と俺も首を傾げてしまった。

思ったよりも反応が薄い。

まさか、ここまで期待させておいてハズレなのか？

「2年前の卒業生だね。後輩の神崎舞って子が色々話をしてくれたんだ」

ミオの様子を伺いながら俺は恐る恐る話すも、ミオの顔に何か手応えに思えるものは見当たらない。

どう見ても、ピンと来るものはなさそうだ。

「神崎舞？」

ミオは、誰だろう？と考え込み始めていた。

これはハズレで決まりかな。

一気に俺の肩から力が抜けた。

なんだよ、期待させる展開だったくせに、神様ひどいなあ。
てつきりもう、ミオにたどりついたのかと思っていた。

俺はこの話はここで打ち切ろうとしたが、ミオの方からそれewith催促されたので、もはや情性で話を続けることになった。

「神崎さんが言うには高校生を卒業してすぐに交通事故で無くなっ
たらしいよ、その子」

その瞬間ミオの瞳が大きく見開いた。しかし、俺は視線を頭上に
泳がしたために、その一瞬を見逃していたんだ。

「でも人違いみたいだな。その様子だと、他人の空似……」

俺はそう言いかけて、ミオの表情に口をつぐむ。

「……こう……つづ……じこ……？」

大きな動揺。

カタカタと全身が震え、みるみるうちにミオの瞳に涙が溢れ出す。
その様子を目の当たりにして、俺も動揺し迷いが生じた。

これは……もしかして……！？

続けるべきか否か。

ミオに近づけて嬉しかったはずだったのに。

こんな表情をさせたかったわけではなかった。

俺は自分の今していることの重大さを、はつきりと実感した。
彼女の“真実”が彼女に何をもたらすのかを…。

「ミオ……大丈夫？」

俺がおそろおそろミオをのぞき込む。

その質問には答えず俺の腕を掴み、震えながらミオはまるで勇気を振り絞るように問いかけてきた。

「その子の…名前は…？」

俺は躊躇した。

正直、見ていられなかった。

泣きながら、震えながら、それでも知らなければならぬ“真実”なのか。

そこまで必要なことなのか。

「ミオ…今日はもう止めよう…」

「…名前は？」

彼女の懇願するような瞳に、俺は小さくため息をついた。知りたい。

この先に何が待っているようと、知りたい。

彼女はそう言うのだ。

そして、自分にそれを止める権利はない。

俺は観念してその名前を口にする。

「武山優希^{たけやまゆき}……」

「……ゆき…」

ミオの口からその名前がこぼれ落ちると同時に、彼女の体がぐらりと揺れた。

「ミオっ！」

俺は慌てミオを抱き止める。
ミオは気を失っていた。

この時、彼女の中でコトリと音をたてて動き出したのだ。
止まっていた何かが。
ゆっくりと、でも確実に…。

この時の俺にはそのことに気づきようもなかった。

24 伸ばした手のゆくえ

その日も、雲は多かったが綺麗な月が川沿いの桜を照らしていた。仕事休みである今日も俺は川原に向かう。が、その足取りは重い。

ミオは、“武山優希”の名前を聞いた時だけ過敏に反応した。料理部や後輩の名前ではなく。

そして、“交通事故”にも動揺していた。

それはミオの真実にかなり近づいている証拠に感じられた。いや、もう俺の中ではミオと“武山優希”が一本の線で繋がっていた。

おそらく、ミオが“武山優希”なのだろう。

しかし、俺の脳裏を昨夜のミオの悲痛な表情がずっと頭から離れないでいた。

このまま彼女の素性を突き止めるようなことをしても大丈夫なのだろうか。

このまま彼女がすべてを思い出すが、いったいどういう結果をもたらすのだろうか。

…そう、すべてを思い出したら。確実に何かが変わるのだろうか。

一瞬、俺の中に不安がよぎる。

その不安を吹っ切るように、俺は頭を振った。

考えながら歩いているうちに、大きな桜の木にたどり着いていた。何度見てもその幹の太さ、枝の広がり、大きな根、そのすべてに圧倒される。

神々しい、という言葉が俺はぴったりだと思った。

その桜の木の下に現れる少女。

晴れた日の、決まった時間に、俺に笑顔をふりまく少女。そして、俺はこの桜木の下に現れる少女に思いを馳せた。

晴れた日の、決まった時間に、俺に笑顔をふりまく少女。
俺が今、誰よりも大切に想う、たった一人の少女。

俺は、はっとした。

どうやら0時をいつのまにか回ったらしい。考え事に集中しすぎて、ミオが来たことにも気がつかないとは…。

俺は自然にふっと笑顔がこぼれる自分を自覚しながら、ただいま、と隣に立つミオに優しく抱き寄せようと手を伸ばした。

が、俺の手は数秒後ぴたりと止まる事になる。

「……どうした？」

ミオは笑顔で口をパクパクと動かすも、彼女の可愛らしい声が聞こえてこない。

ミオは何？というように唇を動かし、首をかしげた。
やはり声は聞こえてこない。

「ミオ、声どうしたの？」

俺はミオの顔をまじまじと見つめながら、問いかける。

ミオは眉間に寄せながら、口を動かした。

どうやら、彼女は普通に話しているつもりのようなのだ。

だが、俺の耳にはその声は届いていない。

俺の声は彼女に聞こえているようで、彼女は何がおかしいのか分かっていないようだった。

どういうことだ？

なぜ、突然こんなことになったんだ。

だって、昨日までちゃんとミオの声は聞こえていたじゃないか。

俺は愕然としながら、ミオの顔を見つめていた。

心配そうに彼女は俺を見つめ返している。

「ミオ…」

俺は、ごくくんと無意識に生唾を飲んだ。

名前を呼ばれたミオは、きょとんとして俺の次の言葉を待っている。

「ミオは今普通に話しているんだよね？」

え？とミオの口が動いた。

彼女の声は聞こえないが、そう言ったのは分かった。

「ミオには俺の声は聞こえてるんだろう？」

ミオはごくくと頷く。

「俺に、ミオの声は聞こえない」

その瞬間、ミオの表情が文字通り固まった。

「ミオ…」

俺の呼びかけに、不安げな顔を向ける。

「原因は思い当たらないよね？」

再び頷く彼女は、今にも泣きそうだ。

きつと彼女にもどうしてこのようになったのかわからないのだ。

わけが分からない。

理由も原因も、……現状すらも。

やるせない気持ちで俺はそっとミオを抱きしめようとした。

え？

今度は俺が固まる番だった。

俺が伸ばした手が、ミオの体を通過したのだ。

そう、確かに通過した。

……嘘だろうか？

俺は、ぐつと唇をきつく結んだ。

信じたくない。

受け入れたくない。

意を決したように俺は、もう一度ミオの肩に手を伸ばす。

おそろおそろ…手を伸ばす。

しかし、震える俺の手が、再び彼女の柔らかな肩の温もりを感じることはなかった。

俺は切り刻まれるような胸の痛みを感じた。

もう、君に触れることはできないのだろうか。

もう、君の体温を感じることはできないのだろうか。
もう、君の鼓動を自分の鼓動に重ねることはできないのだろうか。

「ミオ…」

俺は震える声で、ミオに呼びかけた。

潤んだ瞳から涙がこぼれていた。

ふと、見ると彼女の手が俺の胸にそつと触れていた。

いや、正確には触れているように見えていた。

俺にはその感覚は伝わらなかったで、彼女が俺の左胸に手を当てていることにすら気がついていなかったのだ。

そして、そこからミオ自身も悟ったようだった。

「…触れないんだ。君を抱きしめられない」

自分の口からでた言葉に、現実が起こっていることを再確認させられる。

ミオの頬を綺麗な涙の雫がつつたっているのに、それを拭ってやることも…

頬を両手で包み込んで、おでこをくつつけて笑いあうことも…
何よりも…君の可愛い笑い声が聞けない。

どうしてなんだ。

なんでなんだ。

俺たちは多くのことは望んでないだろう。

一緒に居る時間が欲しい。

それだけじゃないか。

俺は好きな人と一緒にいたいだけなんだよ。

声が聞きたい。

抱きしめたい。

普通のことじゃないのか。

それすら、俺たちには許されないのか。

「ミオ……」

次の言葉が出てこなかった。

不安そうなミオを励ましたいのに。

笑う顔が見たいのに。

上手い言葉が見あたらない。

自分の無力さを痛感した。

……ミオを……泣かすことしかできないのか俺は……。

不意に溢れる涙を拭うこともせずに、ミオが俺の胸に飛び込んできた。そしてそつと俺の唇に自分のそれを重ねる。

俺は目を閉じた。

……感じない。

確かにそこに彼女は唇を重ねているのに……目を閉じると自分の存在しか感じられない。

俺の閉じた瞼から、涙がこぼれた。

目を開ければそこに、確かに彼女の姿はあるのに。

何も感じないんだ。

君を。

苦しい……

俺は一步後ろへ足を動かした。
すると、俺の首を抱いていたミオの腕がすーっと俺を通過して、
簡単に離れる。

ミオは顔をくしゃくしゃにして、地面に膝をついた。

ごめん。

ミオ…。

「ミオ…またくるよ」

俺はそう言い残して、ミオに背を向けて走り出した。
そう言うのが精一杯だったのだ。

一緒にいるのがつらいなんて…そんな日がくるなんて…。

考えもしなかったんだ。

君がこんなに愛しいのに…。

今は、一緒に居ることに耐えられない…。

俺は河原沿いの道まで戻ってくると、走る気力もなくなっていた。
肩を落としてとぼとぼと家路につく。

頬を伝う涙を拭うことすら忘れて、ただただ歩いた。

さつき桜木に向かう間に俺の頭を一瞬過ぎた不安が再び俺を襲
う。

分かっていたことだった。

いつも、どこかでそう予感していた。

このまま一緒に居られるはずがない。

分かっていたじゃないか。

彼女は、この世にはいない。

死んでいるんだ。

自分は彼女を永遠に失う…。

彼女は遠からず俺を置いて消えてしまっんだ

。

* 25 * 約束

『何度も言うようだけでも…』

電話の向こうから親友のため息まじりの声が聞こえる。

その声がかろうじて俺をつなぎ止めている。携帯を耳に当てているのがせいっぱいだった。

『俺、明日、仕事。朝早いわけ！…て聞いてんのかよっ、おい、新！？』

彼は語尾を荒げるも、それは睡眠妨害に対する苛立ちではなく、電話をかけてきたくせにひたすら黙秘し続ける親友を心配してのことであることは俺には分かっている。

『おい。切るぞー俺は寝てしまっぞー。3秒以内に返事をせい』
困り果てた純のため息が、携帯から真っ暗な俺の部屋に響き渡った。

『霊媒師やり始めて、失敗して詐欺扱いされてパクられでもしたのか？ん？』

そんな適当なことを言い出す純に、思わず突っ込む。

「……あほか」

『あほ！？おまっ…俺のまじめな心配をあほ呼ばわりとは、何様だ！』

心配に真面目と不真面目がある時点でどうかと思う。

俺はそんなことを思いながら、この親友のペースに乗せられ、少し自分を取り戻しつつあるのが悔しくもあり、有り難くもあった。冷静になって考えてみようと思えてきた。

「純…」

『ん？』

やっと話す気になったか、と言いたげな返事に俺はふっと笑みがこぼれる。

「寝ろ」

なんだとーっ！と絶叫する彼の電話を一方的に俺は切った。

悔しいので礼など言ってやる気はさらさら無かった。

きつと純は、今頃あーだこーだと独り言を呟きながら、それでもあつという間に寝ているのだろう。

でも何となく、純には伝わっている気がした。

もう、大丈夫だと、あとは一人でやれると。

電話を切った俺は、ゆっくりと立ち上がって台所へ向かい、冷蔵庫からウイスキーを取り出した。グラスに氷を入れると、カランといういい音が部屋に響き渡る。

よいしょ、とため息まじりに呟きながら、再び床の上に腰をおろした。

やっと落ち着いてきた。

冷静に考えてみよう。

昨日まで、触れることが出来ていた彼女に、どうして急に触れることが出来なくなってしまったのか。俺の声は届いているのに、ミオの声は俺には聞こえないのはどうしてなのか。

どこかに原因があるはずだ。

今日から異変が起きたのだから、きつと原因は昨日に隠されているに違いない。

だったら考えるまでも無い。昨日起きた異変。

それはミオのあの様子を思い出せば、火を見るよりも明らかだ。

「……記憶か」

ミオは確実にあの時、激しい動揺から察するに、“あの名前”を聞いて何かを思い出したのだ。

そういえば、以前にもどんなに懸命に歩いても歩いても離れることの出来なかった桜の木から、2歩ほど歩くことができたことがあった。

それも、思い起こせば、背比べをしたりしている間に何かを思い出したといっていた頃じゃなかっただろうか。

そして、それを思い出したゆえに、桜の木のまるで呪縛のようなものが少し緩んだのだ、と言えないだろうか。

そこまで考えて俺ははつとした。

以前、一瞬だけミオの体を俺の手が通り抜けたことが前にもあったではないか。

そうたしか……妹だ！

あの時、ミオは妹がいると言っていた。そう言って泣き崩れたミオを支えようと手を伸ばした時に、俺の手がミオを通り抜けたはず。

あの時も、『記憶』。

もしかして『記憶』を手に入れる代わりに、ミオはこちらの世界から徐々に遠ざかっていつてゐるのではないだろうか。

もし、そうだとしたら……最終的に全部思い出したら。

ミオは消えるかもしれない。

自分の出した結論に、俺は胸を締め付けられる。

ミオに会えなくなる。

二度と。

でも、同時に思うんだ。

ミオにとって、このままあの桜の木の下にい続けることが、いいとはとても思えない。あんな寂しいところに、毎晩毎晩、ミオだつて居たいと思つてゐるわけがない。

第一、泣きながら、顔を真つ青にさせて、あの木の下に現れた日だつてあつた。それもあの日はたまたま俺が居合わせただけで、俺の知らない間に何度も同じことがあつたのかもしれない。

あの暗い桜の木の下で、どれだけの時間を一人で彼女は過ごしてきたのだらう。

何を思つて、あの木を一人で眺めていたのだらう。

やりきれない気持ちでグラスを口へと運ぶと、再び氷が鳴いた。目を窓の方へ泳がすと、カーテンの隙間から、月俺かりが暗い部屋へさしこんでいた。

やはり、ここに彼女のいるべき場所はないのだらう。
いてはいけないのかもしれない。
それが自然のことなのかもしれない。

知らないうちに溢れた涙が、俺の頬を伝ってぼたりと床に落ちた。

今度は…俺が、自分で、手を離すのか…。

あの時は、突然に愛する人を奪われた。でも今度は、自分で愛する人の手を永遠に離すことになるのか。

手を離す気になれるだろうか……。

再び愛する人を失うことに、自分は耐えられるだろうか……。

俺は深く深くため息をついた。

まだ、覚悟ができていない。

ミオに笑顔で会うことが出来ない。

その自信がない。

それでも、ミオを愛する気持ちはこれっぽちも薄れていないのも確かだった。

どうして、君に会ったのだろう。

どうして、君だったのだろう。

君に出会えたことに意味があるなら、俺はそれを果たそう。

都合の悪い現実を見てみぬふりをして、辛いことを忘れたふりをしていても仕方ない。

全部受け止めて、その上で、しっかり前へ進んで行こう。

そこに、俺と君が共に歩む道が無いとしても。

もしかしたら、ミオは俺にこれを教えるために俺の前に現れたのかな。

“いつまでそうやって逃げてるつもり？”

そう“君”が言ってるって、伝えに俺の前に現れたのかな。

俺の脳裏に一瞬懐かしい笑顔が浮かんだ。

「美生^{みお}…君か？」

自然に笑みがこぼれた。それが本当に不思議だった。だって、“君”ならそうしそうだなって思ったんだ。

そうだな。

ちゃんと前に進まないとな。

俺は生きてるんだから。

これからも生きていけるんだから。

“君たち”を愛した自分を誇りに思いながら、これからを懸命に生きていこう。

やることは決まった。

俺はぐつと唇をかみ締めた。

そして、俺は明日からそれを行動に移すために、その日は早々に床につくことにしたのだった。

* 26 * 扉の向こう（前編）

俺は窓の外から聞こえる雨の音で目を覚ました。ベッドから起き上がらずに、手を伸ばしてテレビのリモコンを探りあて、テレビをつける。チャンネルを回すと、ちょうど天気予報が流れてきた。あさってまで、予報によると雨が降り続くという。

俺は、どこかほっとしている自分に気がついた。

ここ約一週間、ミオには会っていない。

目を覚ました俺に気がついた子猫が、朝ご飯を催促しに近づいてきた。

どんな時でも朝はやって来る。

どんな時でも腹は減る。

俺は重たい体を起こして、ベッドを後にした。

今日は日曜日。俺にとっては久しぶりに仕事から解放された休日だった。休日とはいっても名ばかりで、俺が仕事に精を出すことが日常茶飯事だからだ。やることは山積みなんだ。どこから手をつけていいか分からなくなるほどに、いくらでも沸いてくる。

ちゃんと休日には体を休めないと健康的ではないということとは、重々承知していた。友人たちや同僚から、『働きすぎ！』とお叱りを受けることも、少なくない。いや、しょっちゅうである。

それでも、俺はまるで自分を虐めるように仕事をしてきた。そう、あの日からずっと。

しかし、今日は違った。

久しぶりに、完全にオフの日を作ってあった。それは、もともとある計画を実行するためだった。

それは、
“武山優希たけやま ゆきに会いに行く”ということだった。

もう彼女が亡くなっているということや、武山優希の実家の住所が分かった時点で、その武山家に訪れてみるつもりだったのだ。
先日のミオの異変を目撃する前に、予定していたことだった。

ミオのあんな姿を思い出すと、以前のように心弾ませて武山家にいくことは、もうできないでいた。

それでも、俺は真実を受け入れよう。
行こう。ミオ、君の住んでいた家に。
君に会いに。

数時間後、俺は、地図を片手に傘をさしながら『武山』という表札の家の前に立っていた。俺のアパートから電車を使って1時間ほどの距離だった。都心から少し離れた閑静な住宅街に、彼女の家はあった。

俺は、しばらくの間、そのインターホンの前で立ち尽くしていた。
その玄関のドアが、俺には大きく重く感じた。このまま、ドアの向こうへ足を踏み入れないという選択肢もある。そうすれば、ミオとも、今のまま会うことは可能なかもしれない……。

情けないな……この期に及んで……。

俺は、思わず苦笑した。

一つ大きく深呼吸する。

そして、震える指で、インターホンを押した。

その音に反応して、家の中でゴトゴトと物音がしたかと思うと、「はあゝい」と若い女性の声が聞こえてきた。

……ミオの声に似てる！

俺は心臓が、ドクンと跳ね上がったのがわかった。

玄関のドアがゆっくりと開き、そのドアの向こうにあわられた女性に俺は釘付けになった。

似てる！

俺は息を呑んだ。

どこと無く似ている。

ミオよりも髪は短く、ショートカット。そして、目はミオの方が大きくまん丸だ。口元は似ているかな。

俺は、じつくりとその女性とミオを比較していた。その失礼な視線を不快に思ったのか、気が付いたときには女性の瞳に不審感が宿っていた。

「あ、すいません。あまりにも似ていたので……」

俺は正直に、弁解した。

今度は不思議なことを言い出した不審な男を、女性はいよいよ怪しい、といった顔で見つめ返す。

「私は、武山優希さんの古い友人なのですが……。妹さんですか？」

俺の口から出てきた名前がよっぽど思いがけなかったのだろう、女性は驚いた表情になった。

あ……ミオにそっくりだ。

俺は、少し嬉しくなった。間違いない、ここが彼女の実家だ。そう思うと、自然と笑みがこぼれた。

「優希は確かに、私の姉ですが……。何か御用ですか？」

女性は、どうやら広告や勧誘ではないとわかったらしく、多少先ほどよりは警戒を解いてくれたようだった。

「実はしばらく、海外にいたもので、彼女が亡くなったことをつい

最近聞いたんです。是非、お線香を上げさせていだきたくて……失礼かと思いましたが、今日こちらにうかがわせていただいた次第です……」

俺は、道中に考えてきたシナリオどおりのセリフをつかって説明しはじめる。内心ではこんな内容で信じてもらえるのか、どつきどきであったが、彼女の表情を見る限りではどうやら成功したらしい。俺は、こっそり胸をなでおろした。

「……そうでしたか。そういうことなら、どうぞ」

彼女は、笑顔で俺を家の中に招き入れた。

その笑顔もどことなく、ミオを思い出させる。ただ、若干似ているだけあって、小さな違いが俺にとってはミオをさらに恋しく思わせ、胸がちくつと痛んだ。

俺は、導かれるままに仏壇の前に座った。そこに飾られた写真は確かにアルバムの少女だった。

しかし、なんとなく俺は、その写真はミオではないような気がした。どうしてか、と問われても理由はわからない。なんとなくは、なんとなくである。現在のミオよりも数年若い頃に撮られた写真なのだろう。だから違和感がある、それだけのことなのかもしれない、と俺は特に気に留めないことにした。

俺は用意されていたロウソクに火を点け、線香に煙を立たせる。そして目をつぶり、ゆっくりと手を合わせた。

ミオ。会いに来たよ。

ここで手を合わせて君に話しかけているのも、なんだか不思議な気がするね。

ていうか、これミオに聞こえてるんだろうか……あとで聞いてみよう。

そんなことを考えていたら、俺は思わず噴出しそうになってしまった。しかし、ここで計画を台無しにするわけにはいけないので、必死でそれを堪えることに成功する。

目を開けてロウソクの火を消し、背後を振り返ると、やさしく微笑む先ほどの女性と目が合った。

「ありがとうございます。……まさか久しぶりの再会が、こんな形になるなんて思ってもいなかったのですが……でも約束が果たせてよかったです」

俺は、彼女に向かってスラスラとそうセリフを述べた。我ながら役者だな。

俺がそんなことを思っているなんて知るよしもないその女性は、俺のセリフに興味を示したようだった。

「約束……ですか？」

「はい。といつても幼い頃の、ままごのような約束です」

俺は笑顔で続けた。

「私は中学生のときに、彼女のことを好きだったんですよ。そして海外に転勤になった親についていくことになったので、大人になったらまた会いに来てもいいか、と聞いて彼女にOKをもらったんですよ」

ははは、と笑って見せた俺に、彼女はうれしそうに微笑んだ。

「そうだったんですね。きっと、姉も喜んでと思いますよ。わざわざありがとうございます」

「いえいえ、私が彼女に会いたかったんですよ、ずっと……なのに……」

俺は、そこで言葉をきって、仏壇の方に目をやった。

「詳しいことはせんせん、聞いてないんです。事故だった、という

ことしか……」

「……はい、交通事故です……」

俺は彼女に視線を戻し、そっとその先を促すように沈黙していた。
「一番上の姉の運転する車の助手席に乗っていて、事故に……
一番上の姉は、何とか命を取り留めたのですが……優希ちゃんも病院に運ばれる救急車の中で……」

彼女は、当時のことを思い出したのか、少し顔をゆがめ視線を下に落とし、そう続けたのだった。

「お姉さん……？」

一番上の姉？

三人姉妹だったのか……！

ミオは妹はいるとはいっていたが、姉がいるとは言っていなかった。しかも、姉が起こした事故でミオは命を落としたということなのか。

予想外の新情報に、俺は頭をフル稼働させた。

「はい、みさ姉は実は今も病院に入院しているんです……ちょうど今日、お見舞いに行こうと思っていたんですけどね」

「今も？」

「はい。もうあの事故から、2年。姉はずっと目を覚まさないんです……」

目を覚まさない……？

俺はとっさに、とんでもないことを口にした。

「お見舞い、同行してもいいですか？」

「え？」

案の定、彼女は俺の申し出に驚き戸惑っている。

とにかく、ミオの記憶につながりそうな話なら、一つ残らず持つて帰ろう、その気持ちからでた一言だった。それに、もしミオが事故を思い出したときに、同乗していた姉の安否を気にするに決まっ

ている。その時に、俺の目からみた実際の姉の状態を伝えてあげられるではないか。

とつさにそんなことを考えたのはいいが、正直にこれを説俺するわけにはいかない。

「いや、あの…」

俺は、何とかつじつまが合わないかと、目を泳がせながら懸命にもっともらしい理由を探す。

「……実は、私はお姉さんと同学年で……お姉さんとも面識が無いわけではないので……その……突然で、お邪魔でなければ……是非……」

彼女は、困ったように俺の様子を伺っている。

失敗したかな。

無理やりすぎたか……？

これは、今日は諦めた方がいいかもしれない。

「あの、すいません、ご迷惑ですよね。病院だけ教えていただけますか？後日、改めて伺うことにします」

俺がそう申し出ると、それは逆に手間を取らせて申し訳ない、と思ったのか、「近所なので、一緒に行きましょう」と、彼女は俺が病院に同行することを承諾してくれた。

27 扉の向こう（後編）

病院は確かに、ミオの家から車で10分ほどの距離だった。

その道中、彼女の運転する車の助手席に座りながら、優希の話をしていた。

料理が好きでよく家族の誕生日にケーキを焼いたり、突然おながすいたと夜中にクツキーを焼き始めたりしていたらしい。小さい頃からマイペースで、よく長女や三女と喧嘩をしていたことや、母親に怒られて家出したことなど、どの話も俺にとってはいつまでも聞いていたいような内容だった。

「優希ちゃんも亡くなってから、両親が心配して心配して、私もしばらく車運転させてもらえなかったんですよ」

三女、千明^{ちあき}希さんは不満げに口を尖らせた。

「ご両親の気持ちもわかりますね……」

「そーですけど、車乗れた方が色々便利じゃないですかー！ だいたい、みさ姉のお見舞いもあるし……」

みさ姉、とは長女のことなのだろう。

なんて名前なんだろう？

……知り合いと言った手前、聞くに聞けない。

「……お姉さんは、どこが悪いんですか？」

長女の名前を知らないことがばれないように細心の注意を払いながら、千明希さんに問いかけた。すると、彼女は今までの明るい笑顔を少し曇らせた。

「……それが、確かに事故当時は打撲やら骨折やら、傷がいっぱいあったんですけど……目を覚まさないんですよ。事故からずっと……もう2年……」

2年もずっと？

植物状態だということだろうか。

「ずっと意識が戻らないんですか？」

「はい。お医者さんも原因がわからないみたいで……。松本さん、もう着きますよ。その信号曲がったところですから」
彼女はウインカーを出しながら、そういった。

この時、俺の中で何か引っかかるものがあつた。
何か胸騒ぎがする。

そうこうしている間に、車は病院の駐車場に停車した。結構大きな総合病院だ。

二人は、車を降り、病院の正面玄関とは別の入り口から、院内に入りエレベーターに乗り込む。

なんとなく俺は緊張していた。

そんな俺の様子に気がついて気を使ってくれたのだろうか、それまで無言だった彼女が不意にこちらに笑いかける。

「いつも、このエレベーターで想像するんです」

俺は彼女を静かに見つめた。

「みさ姉が、今日は起きてて『ちー子、遅いよ。おなかすいた』って出迎えてくれるんじゃないかって……。でも同時に、もしかしたら、優希ちゃんみたいにな……冷たくなってるんじゃないかって……。毎回このエレベーターが8階に着くまで、考えちゃうんです……」

その笑顔は、俺には見覚えがあつた。

そう、ミオの笑い方にそっくりだった。同じ家にずっといて、同じように育っている姉妹だからこそ、似てしまっしぐさがやっぱりあるんだろう。

やっぱり姉妹だな。

その、寂しそうな、悲しそうな、でも優しい笑顔。

ミオ、君と同じ笑い方を、君の妹もするんだね。

エレベーターが静かに8階で停止し、ドアが開いた。千明希さんの緊張が伝わってきたのか、俺自身の緊張なのかわからなくなってきた。勝手に指先が震える。

先を歩く千明希さんの後ろをついていく。

ほどなく、彼女が病室に入ってしまった。その病室の前までくると、病室の入り口の脇に『武山美桜希 様』と書かれていた。

……みさき…かな？

「みさ姉、今日も来たよー！いい加減起きたら？」

病室の中から千明希さんの明るい声が聞こえてきたので、俺も病室に足を踏み入れた。

そして、ベッドに横たわる女性に 息を呑む。

物音で千明希さんが俺を振り返る。千明希さんが不思議そうに声を掛ける。

「松本さん？コート落ちましたよ？」

しかし俺の耳には届かない。

まさか。

そんなはずは…。

俺は腰が抜けそうなほどに、衝撃を受けていた。血の気がさーっと引いていくようなそんな感覚だった。

「み……お……？」

かすれた声が、やっとのことで俺の口から飛び出したのと、俺がベッドに大またで駆け寄るのが同時だった。

見間違えるはずがない。

少し俺の記憶の中よりも大人びて、髪の毛も腰まで伸びている。それでも、絶対に見間違えるわけがない。

「ミオ！」

そう、そこに横たわっているのは、ミオだった。

* 28 * 笑顔が見たいから

翌日、俺が職場を後にしたとき、静かに雨が降っていた。現時刻を確認すると、あと十数分で19時。

先日から降っているこの雨は、天気予報の通り、明日まで続くのだろうか。

ミオに会わなくてすむ。

心のどこかでそう思っている自分がいる。

俺は傘をさしながら、家路についた。

傘が奏でる雨音は、俺をどうしても重たい気持ちにさせたが、原因はそれだけではないことぐらい自分でもわかっている。

ミオは、生きている。

今も、しっかりと生きているんだ。

誰に確認したわけでもないが、間違いなく、ミオは“武山美桜希”という女性だ。

彼女は、2年という長い時間、あの病院の無機質なパイプベッドの上に横になったままだという。外傷は無く、素人目には、ただ眠っているようにしか見えない。

静かにリズムカルに呼吸を繰り返す。
ずっと眠り続ける。

そう、目を覚ましたくない理由が、あるからだ。

俺の中ですべてが繋がった気がした。

彼女が目覚めたときには、自分の隣にいた妹、優希の姿はない。しかも、その妹の笑顔を奪った原因は、彼女自身。守れなかった。

妹の未来を、妹自身を。

いや、むしろ。

妹からすべてを奪ってしまった……。

それなのに、自分だけは生き残って……。

そんな現実が、目を覚ましたときに待ち受けていることを、彼女はわかっていような気がした。
もしかしたら、事故当時、彼女は薄れ行く意識の中で、すべてを目にしていたのかもしれない。

だから、目を瞑った。

俺にはその気持ちが痛いほど分かる。身に覚えがあったから。俺もそうだったんだ。
忘れたふりをして、見てみぬふりをして、そこから逃げて。必死に逃げて、逃げて。
でも、もう。

気がついたんだよ。

ミオ、君に出逢って、逃げていた自分に気がついたんだ。
逃げて、何も進まない。
何も得られない。

ちゃんと目を開けて、前を見据えて、苦しくても辛くても、もがいてもがいて、でも、ゆっくりでも一步一步前に進まないで。

今を生きていけないといけないんだ。
俺たちは生きているんだから　と。

だから、彼女に“生きてほしい”。
どんなに辛くても。

そのためには彼女がしっかりと“記憶”に向き合う必要があるのかもしれない。

都合よくいくんだろうか…。
俺は、不安に襲われた。

今、記憶を手に入れたミオは徐々に消えていつている。
彼女がすべてを思い出したとき、ミオは消えて、そして、武山美
桜希^{さき}が目を覚ます　？

漠然と、当たり前のように、そんな気がしていたがそんな保証はどこにもない。

すべて思い出したとき、ミオはそのまま逝ってしまったりしない
だろうか。

よしんば、武山美桜希が目を覚ましたとして、彼女は俺のことを
覚えているのだろうか。

ぐるぐると、俺の頭の中を黒い渦が襲う。

いつの間にか、俺は足を止めて呆然と足元のアスファルトを眺めていたことに気がついた。まだ、時間が早いので、通行人が不審そうに俺を眺めながら、避けて行く。少し、ばつが悪くなって、あたりを見回すも、再び歩き出した。

しかし、すぐにピタリと再び足を止める。

俺は、唇の端にぐっと力を入れて、踵^{かかと}を返した。

1時間後、俺は途中で買った小さな黄色いバラの花束を持って、

“武山美桜希”の病室の前に居た。

ゆっくりと、俺は彼女に歩み寄る。

胸がドキドキと早く鼓動するのは、病院の最寄り駅から走ってきたからだけではないのだろう。

その白い肌。

サラサラと白いシーツに零れた黒髪。

気持ちよさそうに眠る彼女の寝顔を俺はしばらく静かに眺めていた。

そつと彼女の手を握る。

暖かな体温が俺の手に伝わってくる。

「ミオ……」

俺は、彼女の手を握りながら、もう片方の手で彼女の頭をなでた。
「なあ、俺の声が聞こえるかい？」

俺は返事のない彼女の顔を眺めながら、ふつ、と頬を緩ませた。

「もう、目を覚まそう、ミオ。目を覚まして、俺に『ただいま』って言ってくれよ」

やっぱり、全部話そう。

彼女の顔を見て、そして、決心がついた。

おせっかいかもしれないけど、君をこのままにはさせておけないよ。

あの桜の木に縛られて、そして、ここでもベッドに縛られて……ただ寝ているなんて、ミオらしくない。

もし、すべてを思い出したミオがこの世から消えてしまったとしても、あの桜の木に寂しく一人でいるよりずっといいと思うんだ。

それに、すべてを思い出して、ミオが“武山美桜希”として再び人生を歩み始める可能性があるなら、その可能性に賭けたい。

だって。

笑っているミオが見たいんだ。

コロコロ変わる、彼女の表情を取り戻したい。

そして、彼女の声が聞きたい。

今、俺の目の前にいる彼女が、本当に再び目を覚まし、でもその時に俺のことをまったく覚えていなかったとしても、彼女が笑って生きていてくれるなら、それでいい。

俺は、強くそう思った。

「おやすみ、ミオ」

俺は、そっとミオの手の甲にキスをした。

今は、おやすみ、ミオ。

明日はたたき起こすから、覚悟しとけよ。

もう一度だけ、俺はミオの頭をなで、病室を後にした。

* 29 * 桜華の雫（前編）

俺は桜の木の下で膝を抱えるように座っていた。

時刻はあと数分で0時だ。

今回の天気予報は実に正確で、夕方にはきれいな夕日を見ることが出来た。

俺は気持ちを落ち着けるために、一つ深呼吸をした。思ったよりも緊張している。

情けないことに、まだどこかで、躊躇している。

俺は思わず苦笑した。

諦めが悪いな…。

確かに、諦めが悪い。

現状維持を望む自分。

でも、同じくらい諦めの悪い、『彼女の笑顔』を見たいという自分。

いや、こちらの方が若干、気持ちが強いのだろう。

だから、俺は今この桜の木の下にいるんだ。

急に、さわさわと桜の木の葉がざわめいた気がした。生暖かい風が木々を揺らしたのだ。

そして、音もなく、気配もなく…彼女が現れた。

「おかえり、ミオ」

俺は笑顔でそう呼びかけた。わりと冷静な自分に、内心驚く。

ミオは、俺の顔を見止めると、ふわりと笑った。

“ただいま”

その動いたミオの唇でそう言ったのが分かった。そして、ミオも俺の隣に座る。

「ミオ、今日は俺の話を聞いてほしいんだ」

俺はまっすぐと、隣の彼女の瞳を捕らえた。

彼女は、一瞬不思議そうな顔をしたが、コクリと頷いた。うなず

「俺の昔話」

俺は、そう言うてにやりと笑う。それで、構えていたミオの表情が和らいだ。

「昔々、ある青年が、とてつもなくすさまじい女性に恋にをしまった。青年は、いつもいつもいつも彼女に振り回されて……ぐったりしていました」

その、とてつもなくすさまじい女性は何がすさまじいのかというと、とにかく周りを巻き込んで突き進んでいくんだ。

自分のしたいことを、手に入れたい夢を、いつも追いかけてまっすぐに生きていた。

“今”が永遠でないことを知っていた、女性。

「彼女の名前は……美生^{みお}」

俺は少しためらいながら、そう口にした。

ミオの口が『え?』とビックリしたように動いた。

「ごめんね、実はこの名前は、君に付けた名前じゃないんだ……」

ミオは苦しそうな表情で数秒見つめた。その短い時間で、あつという間に涙があふれていく。大きな瞳から雫が零れ落ちそうになった瞬間、ミオはずっと目を伏せた。

俺は、胸が痛かった。

ミオの瞳から零れ落ちた涙で、首が絞まって息が出来ないんじゃないかと思うほど、苦しかった。

最低だな、俺……本人が喜んでたとはいえ、前の女の名前を付ける

なんてな……。

しかし、これも自分が巻いた種。彼女から目を逸らしてはいけない。

俺はそう思ったんだ。

ミオ自身のショックを思えば、甘んじて非難を受けるほかないのだ、と。

俺は顔をしかめ、手をミオの肩へ伸ばそうとして、その手を止める。

今、ミオの涙をぬぐえないことが、抱きしめられないことが、『罰』なのかもしれない。

静かに涙するミオを見つめながら、俺は続けた。

「彼女は、体が丈夫ではなかった。だからこそ、今やりたい、と思ったことは、今やる！ っていう生き方をしていたよ。そんな危なかったところが見てられなかったんだろうね……」

いつでも全力疾走、とはよく言ったものだった。

突然、沖縄の海が見たい！ と言い出して、次の日の朝には、二人でほんとに沖縄に居たことや、京都の桜が見たい！ と思い立ったその日のうちに出発して、『あ、新々？ 今京都へあはは』と電話を受けたので、慌てて京都まで迎えに行ったことや……。

酒は弱いし、あまり飲んではいけないと医者に言われているにもかかわらず、友達との飲み会で、先頭にたって盛り上げているうちにノリで酒を飲みすぎ、前後不覚に陥り『飲んじやった』迎えにきて』と呼び出されたこともあった。

“今”が大事で、今やらないと、“明日”はないかもしれない。そう、彼女はいつもどこかそんな脅迫観念にとらわれていたのかもしれない。

『どうせ、いつか散るなら、桜の花のように、ぱくっと綺麗に咲いて、ぶわくっと綺麗に散りたいな』

彼女の口からそんな言葉が出てきたことがあった。今おもうつと、そのように逝ってしまった気がする。

その日は、俺と純とで次の日の花見計画を立てていたところだった。深夜だというのに俺の携帯が鳴った。

『公衆電話』の表示に俺は首を傾げながら電話を受けた。美生の母親だった。

突然の発作で亡くなった、そう言っていたような気がする。実はよく覚えてない。何を言っているのか理解できなくて……。

「純…悪い」

俺はそれだけ言って携帯を純に差し出した。純が変わりに応答してくれたようだった。気がついた時には俺は純につれられて病院にいた。

そこには…美生によく似た人が病院のベッドに寝ていた。

「みお……」

俺はなんとか美生の近くまで歩いて。

その穏やかな顔を見た。

呼んでも返事がない。

でも寝ているようにしか見えない。

何で目を覚まさないんだ。

昨日、「明日は花見に行こう！桜が見たいの」と元気に笑っていたじゃないか。

こんなところで寝てる場合じゃないだろう。

早く明日の準備しろよ。

そう言っただろうと思ったんだ。

でも……勝手に出てきた涙が邪魔して、声が出てこなくて。

俺はそつと美生の頬を撫でようと手を伸ばした。
でも、できなかった……。

冷たい美生の体を感じることが、美生の死を認めることになる気がしたから。

だから、触れなかった。

怖かったんだ。

怖くて……最後まで俺は、美生には触れることができなかった。
抱きしめてやればよかった、何度もそう思った。

あの時、美生を抱きしめてやればよかった。
もう、二度と抱きしめてやれないのだから……。

そして俺は、彼女の両親から彼女の最後を聞かされた。

『ありがとう、楽しかった。新に会えて幸せだった』

そう、伝えてくれと、彼女は言ったそうだ。

俺は、桜の木を仰ぎ見て、クスッと笑った。

「どうして、最後まで、俺を待っていてくれなかったんだろ。最後まで、俺が彼女を追いかけて、今度は追いつかなかったんだ。逝く時まで突然で、きつと『あ、天国いつてくる』みたいな、その辺に散歩に行くみたいに、逝ったんだあいつは……」

美生の話を、笑いながら話せる自分に少し驚いた。でも、心は落ち着いていた。

俺は、ミオを見た。神妙な面持ちで聞いている。涙はいつの間にか止まっていたが、彼女に笑顔はまだ戻らない。

その時、ミオの唇が動いた。

“大丈夫？”

彼女がそう言った気がした。

その心配そうな表情から、俺が辛い話をしているんじゃないか、そうミオは感じたようだった。

「大丈夫だよ、今はもう……」

俺はミオに笑いかけた。

「確かに、彼女が亡くなったあと、俺は彼女に何も出来なかった、何もしてやれなかった自分を悔いて、恥じて……彼女を忘れないように、過去にしないようにしようとした。でも苦しくて、仕事に逃げた。仕事していれば、何も余計なこと考えないですんだから……ガンガン仕事して、必死になつてた」

そんなときに、君にあつたんだ、と俺は優しくミオに笑いかけた。つられて、ミオの固くこわばっていた表情が一瞬和らぐ。

「君に会って、自分が彼女の死から逃げていたことに気がついて……それで、自分に向き合った。逃げるのはやめようと思った。……君に恋をしたからだ」

こんな気持ちになれたのは、君のおかげなんだよ、ミオ。伝わっているかな、この気持ち。

好きとか、なんて言葉じゃ足りないんだ。

「今度は、ミオの番だよ」

俺は、“私の番？”と不思議そうにしているミオをまっすぐ見つめた。

* 30 * 桜華の零（中編）

俺は一呼吸置いた。

桜の木が一瞬ざわめいたように思えた。まるで、これから俺が言おうとしていることを知っているかのように。

ごくん。

俺の喉がなった。俺のひざの上に置かれた手のひらもぐつちりと湿っている。

「おとといね…」

俺が口を開いた瞬間、ミオの視線がふっと俺からはずされた。反射的に、俺もその視線を追う。

そして、俺は「え？」と小さく声を上げた。

猫だ。

ただの猫ではない。俺の家にいるはずの、あの白い子猫だった。

「雪？」

俺は、眉間にシワを寄せた。どう見ても、あの子猫がゆっくりとこちらに向かって歩いてくるようにしか見えない。

なんで？…今日、部屋の窓を開けっ放しで仕事にでたのか？

自分で子猫が、玄関を開けて出て行くわけではないし、さすがの俺も玄関を開けっ放しで出てくるほど、泥棒に親切なはずはない。

俺が首をかしげている間に、子猫はそっとミオのひざの上に座った。そして、一つあくびをしてから丸くなる。

のどをゴロゴロと鳴らしながら、ミオになでられている子猫の姿に俺は呆然とするしかなかった。

まったく自然だ。

いつも、そうしているかのように、当たり前子猫はミオのひざの上におさまった。

ミオまでもが、ごく日常的な様子で優しい表情で子猫を撫でている。

…どうなってるんだ？

俺が言葉を失っている、ミオが視線を上げた。

そして、ふわりと笑う。

俺は目を奪われていた。

綺麗だ。

笑顔が一番、彼女には似合う。

やはり、彼女にはいつも笑顔で居てほしい。

これが、俺自身のわがままだと言われても、おせっかいだといわれても、迷惑かもしれない。

…さあ、ミオ、起きる時間だ。

俺は自然に笑顔になった。

どうやら、思いもよらぬ乱入者に、すっかり緊張がどこかに飛んでいってしまった。おかげで、リラックスして話始めることができた。

「おととい、君のうちにいったんだよ」

笑いかける俺に、ミオはきょとんとしていた。

“私の…家？”

聞こえないはずの、彼女の声が俺の耳にそう届いた気がした。

俺は、うん、とうなずいて、こう付け足す。

「武山優希さんの家に、線香を上げに行ったんだ」

その瞬間、ミオの表情は一変した。猫をなでていた手がぴたりと止まる。

はつきりとした動揺が俺に伝わってきた。

ゆっくりと、彼女の小さな唇が動く。

“…優…希……？”

そうだよ、ミオ。

君がまずは妹の死を受け入れることだ。

俺は、ミオの顔をじっと見つめた。どんな変化も見逃さないように。

「君は、知りたい？」

俺は一言一言、かみ締めるように言った。

ミオの瞳の動揺の色が濃くなる。

だから、俺はもう一度しっかりと確認のためにミオに問いかけた。

「優希さんの妹の千明希さんに会った。彼女から聞いた話、君は聞きたい？」

以前、確かに彼女は真実を知りたいと言っていた。

だが、すべてを知る覚悟が今、彼女にあるのだろうか。

俺は、彼女が聞く気になるまで、記憶を取り戻す覚悟ができるまで、何日でも待つつもりでいた。

彼女が過去に向き合うことの手伝いができても、彼女自身がその気にならなければ、ただ事実を突きつけても、何の意味もない思っただけだ。

俺はじつとミオの表情を窺う。

彼女は、おどおどと、定まらない視線を泳がしている。

その心の中までは、俺には分からない。

ミオは今、どのくらい記憶を取り戻しているのだろうか。

何を考えているのだろうか。

俺にわかるのは、その俺らかな青ざめた不安げな表情と、握り締められたその両手から伝わる緊張。

だから、ただじつと、俺は返事を待つしかなかった。

* 31 * 桜華の雫（後編）

どのくらいの時間がたったのだろう。

俺には長く長く感じた沈黙。

ミオは、ひざの上の猫を見つめたまま動かない。

猫は規則正しく、体を上下に動かしている。と、猫の耳がぴくつと動いた。

同時に彼女の唇が何かをつぶやいたのを見逃さなかった。

「ミオ？」

俺が、もう一度、返事を促すと、ミオがずっと顔を上げて、俺をまっすぐ見据えた。

“教えて”

彼女の口がそう動いた。

「知りたい？」

俺は確認するように聞くと、ミオは、少し間を置いてから、こくん、と首を縦に動かした。

何かを断ち切るように、ミオは凜とした顔で俺を見つめ返していた。

だから、俺も彼女と一緒にその何かと戦う覚悟で、うなずき返した。

「2年前、優希さんがうちの高校を卒業した年の春」

俺は、彼女の顔をうかがいながら、ぽつりぽつりと話し始めた。

「4月の優希さんの誕生日に、彼女のお姉さんと妹と3人で花見に出かけることになっていた」

しかし、末の妹は、当時付き合っていた彼氏が遊びにくるということで、優希と姉の二人で行くことになったそうである。

「そう、向かった先は、この桜」

この川原沿いの道には、途中に公園がある。この公園はいわゆる、花見の時期には普段の何十倍もの人でごった返すのが毎年恒例となっている。

幼いころによく見た桜を、久しぶり見てみたくなったといっていた、と千明希さんが寂しそうに語った。私も一緒に行けばよかったな、と付け足して。

「二人は、お姉さんの運転する車で、ここへ向かった。でも、たどり着かなかったんだ。途中で、交差点でトラックにぶつかって…」
そこまで話したとき、彼女の膝の上で寝息を立てていた子猫が、ビクッと体を揺らした。そして、何かといわんばかりに、自分の体の上に置かれた、彼女の手を眺める。その手は、子猫の体をつかむようにして震えていた。

大丈夫だろうか…やめたほうがいいのかな…。

俺は不安になった。彼女は下を向いたままで、表情がつかめない。
「…ミオ？」

はっとしたように、ミオが顔を上げる。そして、なんでもない、というよう首を横に振って笑顔を見せた。

いや、笑顔を作った、というのが正しい。その証拠に、彼女の瞳は笑っていない。

ミオはその弱々しい笑顔で、俺の言葉を待っている。

俺も笑って見せたが、きっと引きつっていたに違いない。

「千明希さんが、病院にたどり着いたときには…優希さんはもう息を引き取っていたそうだ」

俺がそう告げる間に、ぐっとミオは唇をかみ締めて、目を伏せた。いい終えた頃には彼女の頬を伝った雫が、ぽたっと彼女の膝の上に落ちていた。

その涙で、再び目を覚ました子猫が、彼女を見上げる。そして、子猫が体を伸ばし、まるで彼女を慰めるように彼女の頬を流れる涙をぺろりと舐めた。

その瞬間、こらえきれなくなつたのかミオは両手で顔を覆って激しく肩を上下させ泣き始めた。

その嗚咽こそ聞こえないが、きっと、妹の優希の死を嘆く、初めての涙なのだろうと俺は思った。

もしかしたら、ただ、妹を失った悲しみからだけのものではないかもしれない。

謝罪や自責の意味もそこに含まれているのかもしれない。

助けられなかった、後悔も。

そんな悲痛の涙なのかもしれない。

受け入れることすら出来ないでいたほどの、強い強い悲しみのミオの、聞こえないはずの泣き声が、俺には深く、悲しく、激しく、苦しく、聞こえてくる気がした。

それでも…。

苦しくても…。

受け入れるしかないんだよ…君がちゃんと。

生きている君が受け止めてあげてよ、妹の死を。

俺は心からそう願った。

そして、ここからが勝負だ、と俺は思った。

「車を運転していたお姉さんは奇跡的に助かったけれど、今も意識が戻らない」

姉の存在を、彼女に告げたのだが、その反応はなかった。

先ほども、さらりと“姉”という単語を出したが、まるで人事のように流れていった。

もう、自分がその姉であることをすでに、思い出していたのだろうか。

もしかしたら、以前『私死んじやってるみたい』と、飄々と言つてのけたのだから、妹が亡くなっていてその車に同乗していた自分も妹と一緒に命を落としたと思っっているのだろうか。

あれ！？

そこで俺は異変に気がついた。

俺は身を乗り出してミオを見つめる。

彼女と子猫の色の濃さが違うことに気がついたのだ。

つまり、彼女の色が透けている！

さっきまでは、そんなことはなかった。

確かに、今は、子猫の方がはつきり見えている。

時間！？

いや、まだ10分ある！

俺はもう消えてしまうのではないかと不安になって、彼女に声を掛けた。

「ミオ！」

すると彼女が、ゆっくりとこちらを向いた。

自分の声は聞こえているらしい。少し、俺はほっとした。

俺の話を聞いて、新たに記憶を取り戻したために、確実にまたこの世界から離れていつてる、ということだろうか。

そこで、俺はいやな疑問にぶち当たった。

もし、このまま自分が生きていることに気がつかないで、ミオがすべての記憶を取り戻したら彼女はどうなるのだろうか。

おそらく、このまま彼女がすべてを受け入れてた時、“ミオ”は姿を消すのだろう。

しかし、その時に、彼女自身が“生きよう”と思えなかったら…？
：眠ったままの彼女の肉体が今度は死を受け入れてしまうなんてことはないだろうか…？

つまり…。

武山美桜希が死んでしまうということは　！？

俺は、自分の考え出した結論に、背筋がぞっとした。

冗談じゃない！

心の中で俺は思わず叫んでいた。

俺がそんなことにはさせない。

不安でいっぱいな筈なのに、俺は強い自信に溢れている気がした。

俺は、深く、深く、深呼吸してから、再び口を開いた。

「ミオ…よく聞いて」

大丈夫。

彼女なら、大丈夫だ。

俺はそう自分に言い聞かせた。

ミオは、涙をいっぱいに貯めた瞳で俺を見つめ返した。

「俺は、君に会えて本当に、自分が変わった。君が俺を変えたんだ」

弱い自分と向き合う勇気をくれた。

君に出会わなかったら、俺はあのままずっと…“今”を生きることはできなかった。

君を愛したことを誇りにして、これから生きていく。

俺はそう決めた。

その隣に、君がいてくれたら、もっと強く、もっと楽しく、もっと幸せに、生きていけると思うんだ。

だから…。

「君にも、ちゃんと生きてほしい」

彼女は、何を言っているのか分からないといった表情で、俺の次の言葉を待った。

俺は、一呼吸おいて。

しっかりとした声で。

こう、告げた。

「君は、生きているんだよ。まだ生きている」

彼女の震える唇が、小さく、え？と言った気がした。

やっぱり、彼女は自分が死んだと思ってるんだ、と俺は確信した。
「だから、逃げるな」

苦しくても目を開いて、ちゃんと先を見据えて。

「俺と一緒に前へ進もう。一緒に生きていこう」

“いきる？”

彼女の声がした。

俺は、空耳かな、と思いながら彼女を見つめた。そのまっすぐな瞳に吸い込まれる気がした。

“新くんと、一緒に…生きる？”

今度は俺にはっきりと、そう聞こえた。

「そうだよ」

俺はそう返事をしながら、自然に笑顔になった。

「君が好きだよ。」

幻でも、夢でもない。現実でしつかり、君と生きていきたい。

苦しい、悲しい、痛みのある現実の世界だけど、その中の小さな幸せは、きっと君となら見つかるはずだから」

だから、これはさよならじゃない。

俺たちの始まりだ。

「だから…ずっと一緒に、二人で生きていこう」

その時だった。

彼女がふわりと笑顔になった。そして、ずっと俺の目の前に移動し、ゆっくりと唇を重ねる。

俺は目をつぶった。

彼女の存在はその唇からは感じられないが、でも、たしかに彼女の気持ちの流れ込んできた気がした。

暖かいキスだった。

目を開けると、少し照れた彼女の顔があった。久しぶりに俺が目にした、ミオの、いや、俺が初めて目にした美桜希^{みさき}の、心からの笑顔だった。

俺はその笑顔に胸をぎゅっと締め付けられた。瞳から自然と涙が溢れる。

愛しい。

もっとうとうとこうしていたい。

彼女を力いっぱい抱きしめたい。

でも…。

いや、だからこそだ。

そして、俺は力強く続けた。

しっかりと彼女の瞳を捕らえたまま。

ありったけの心を込めて。

ありったけの笑顔で。

君が迷わず、俺のところへ帰ってこれるように。

「目を覚ませ、美桜希」

刹那。

彼女の、美桜希の瞳が大きく見開かれた。

そして俺が瞬きをした次の瞬間、彼女の姿はそこにはなかった…。

エピソード

また、桜の季節がやってきた。

俺は、あの日から、無茶な仕事スタイルを見直し、休日をしっかりと取るようになった。

そして、休日に、ふらりと彼女の病室にデートに行く。

手には黄色いバラの花束を持って。

ピンクだと可愛いすぎるといわれそうだし、真っ赤だと不似合いな気がする。

彼女には元気な黄色が似合う。

やっぱり今日も、病院へ向かう途中で購入した黄色いバラの花束を、持っている。ふさがっていない方の手で、エレベーターのボタンを押して、8階を目指した。

あの日から、彼女はある桜の木には現れなくなった。

不思議なことに、あの白い猫も姿を消した。

よく考えたら、あの、子猫に導かれるように彼女に出会ったわけだ。そして、彼女とともに消えた。もしかしたら、あの猫も、“彼女側の世界”の住人だったのかもしれないな。

そんなことを考えている間にエレベーターがゆっくりと8階で停止した。

「あれ、新さん！」

エレベーターを降りたら、後ろから聞き覚えのある声がした。

「また来てくれたんだ。ありがとう」

千明希さんだった。

先日は、彼女たちのお母さんと鉢合わせして、話のつじつま合わせに少しあせった。

千明希さんと一緒に病室に入る。

「ただいま、美桜希」

「新さんは、いつも『ただいま』っていうよね」

おかしそうに笑いながら、千明希さんが花瓶を片手に、俺の持っていたバラを受け取った。

「いいんだよ、ただいま、で…」

なんとなく口ごもったのは、照れたから。

「みさ姉、いい加減起きてあげないと。きつと新さん、シワシワのじじいになってもバラもって現れるよ！」

千明希さんは、すごいことをさらっと言いながら、花を花瓶に活けに、病室を出て行った。

「…別にいいさ。シワシワのばあになった君に、バラの花束もって現れてやるさ」

きつと君は、シワシワになっても可愛いだろうな。

そして、可愛い声で『新しくてホント可愛いね』とケタケタ笑うんだ。

「いや、可愛いのは、美桜希だろうが…」

自分の想像の中の彼女に突っ込んでしまう自分が、なんだか恥ずかしくて、窓側へ移動した。

窓の外から、病院の庭に植わっている満開の桜が見えた。

あれから一年。長いようで短い。

俺にとっては、本当に大切な一年だった。

不思議だな。

君はこのまま眠り続けているような気がしない。

もはや、確信に近い。根拠なんてないのに。

「ただいま…」

そう、俺に、そう言って笑いかける気がするんだ。

たとえ、俺のことをすっかり忘れていたって、また、ゆっくり君が俺を好きになってくれるように努力すればいい。それだけのことじゃないか。

だから、目を開けて。

辛い現実が待っていたとしても、ちゃんと受け入れて、それでも前に進んでいこう。

俺が隣にいるから。一緒に前に進もう。

はっ、と俺は我に返った。

確かに聞こえた。今、『ただいま』って

え…空耳！？

俺は勢いよく、振り返った。

「ただいま、新くん」

そこには、俺の望む“すべて”があった。

あとがき

ここまで新とミオの純愛にお付き合いいただきありがとうございました。

「ただいま」と言える相手がいる、言える場所があるというのは、実はとても幸せなことだと私は最近になって思うのです。

もちろん、あたりまえのように返ってくる「おかえり」がある幸せも。

「ただいま、新くん」

きつとそれは、新と会話ができなくなってからずっと、ミオが一番言いたかった言葉だったんだろうと、私は思います。

それにしても、あの後の病室では新はおそらく、面会時間ぎりぎりまで居座り、看護婦さんに追い出されるまでミオから離れなかったことでしょう。千明希にドン引きされてそうですよね。

また、こちらの作品は前回は不勉強な3人称であったのですが、このたびすべて1人称として書き直す決意をしました。拙い処女作ではございますが、ここに完結できたことを嬉しく思います。

さて、二人の物語はここでめでたくハッピーエンドとなりました。
が。

本作品は第2弾、第3弾と続く予定です。
もちろん、物語の鍵となるのは子猫の雪ちゃん！

第2弾『ろうげつ朧月の標しるし』、近日公開予定です。
そちらもあわせてお付き合いいただけたらと思います。

最後になりましたが、簡単なご感想、ご意見、「読みました！」
のご一報でもかまいません。評価等いただけますと、次作の励みに
したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2008・6・29 日向あおい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1199e/>

桜華の雫

2010年10月8日13時32分発行